
前田珠子
COBALT-SERIES
天女の舌
いにしえこいうた
古戀唄2
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた） 2

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄(いにしえこいうた)2

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　古戀唄2

天を支える者　古戀唄2 …… 7

あとがき …… 188



ガジェス
ファラスース侯
爵家の三男坊。

クランクレイア
「女神の娘」と呼ばれる
ディエーン王国の王女。

登場人物紹介


フィオーン王子
クランクレイアの兄で
ディエーン王国の
王位継承者。
ギスカリール
ハーリクとも高貴な人々
とも親しい謎の青年。
ハーリク
ガジェスの親友。
実家は土産物屋。

イラスト／明咲トウル

天を支える者　古戀唄（いにしえこいうた）2

7

それは、新年休暇が明けて早々の出来事だった。

故郷のダランジェイドではなく――なにしろ、往復するだけで、休暇の大部分が費やされてしまう計算になったものだから――王都ロスタロイドにあるファラスース侯爵邸で、初めて新年を迎えたアマンシールは、少々バテ気味で王立学院の寮に戻っていた。

新年を、ずっと故郷でのんびりと迎えていた彼にとって、王都における慌ただしさは、完全に未知のものであったため、気力と体力を大幅に消耗してしまったのだ。

寮に戻ったときなど、思わず安堵の息を洩らしてしまったほど、ロスタロイドにおける屋敷の騒ぎは強烈だった。

（あー、やれやれ。まったく、何事かと思ったぞ、あのひとの出入りの多さには！あれじゃあ、母上がどんなに頼んでも、父上がダランジェイドに戻って来られないはずだよなー。元日の午前中だけは、王宮での行事があるから静かだったけど、午後になるなり、来客の嵐なんだもんなー）

おかげで、年が明けて以来、アマンシールは書庫と冬の庭でしか息をつくことができなかったのだ。

とにかく、来客、来客、また来客という、慌(あわただ)しい状況が、休暇終了直前までつづいたのだ。一部を除いたそのほとんどが、父やその手伝いをしている長兄への挨拶(あいさつ)目当てだと聞いたときには、心底彼らふたりの気力と体力と忍耐力に、尊敬の念を抱いたものだ。

もちろん、父や長兄が、それだけのひとに足を運ばせるだけの働きと力を常日頃(つねひごろ)発揮しているからこそのことだとはわかっていたが、それでも自分にはそんな忍耐力はない、と早々に見抜いた挙句(あげく)、さっさと客の目から逃れまくる道を選んだ彼には、確かにファラスースという大家(たいか)を支える者としての自覚は欠けていたと言えよう。

父であるリュシアンドが、いかにその才を惜しもうとも、その気もやる気もまったくないアマンシールにとって、そうした客たちは単なる騒音の源でしかなかった。

おかげで、休み明けだというのに、彼は軽い疲労感さえ覚えていた。

同時に、たった三カ月ほどしか過ごしていない学院寮が、涙がでるほど懐かしく感じられた。

（あー、落ち着く。いっそ、今年の年末は、なにか理由をでっちあげてでも、寮に残るとかできないかなー？）

肉親への情愛と、一連の騒ぎのもたらす面倒くささを秤にかけ、薄情にも後者を避けるための段取りを始めたアマンシールの肩に、かなり……洒落にならない衝撃が加えられたのは、次の瞬間のことだった。

「よーう！　新年、明けましておめでとう！　元気にしてたかー？」

よろめきこそしたものの、そのまま転ばなかったのは、アマンシールの長年の『自然学習』の賜物だった。

野山を歩き回っていれば、自然足腰は鍛えられるものなのだ。

「……明けましておめでとう。……ハーリク、きみねえ……」

容赦のない力で、背後から思い切り肩をたたいて――ド突いて（？）――くれた、赤茶の髪とソバカスが印象的な少年の名を口にする。

アマンシールと違い、休暇明けの同級生ハーリクは、休みの間に気力も体力も満タンまで充塡してきたらしかった。

表情豊かな点は変わらないが、顔色……というか、肌の色が格段によくなっている。心身ともに、楽しい休暇を満喫した証拠だった。

（なんか、ちょっとだけ、恨めしいかも……）

八つ当たりめいた思いを胸に抱いたアマンシールに気づかないのか、ハーリクは嬉しそうに自分の鞄を指さした。

「いやー、親父の客のひとりがさ、珍しい東方の茶っ葉持ってきてくれてさー。親父たちにゃ豚に真珠の代物だったから、こっそりくすねて来ちゃったよ。入学以来、お前にはうまい茶とお菓子を御馳走になりっぱなしだったからな、ここらでちょっと恩返しをだなー」

恩返しに、くすねてきたお茶というのは――などということは、アマンシールは言わなかった。

茶道楽者の伯父から直々に薫陶を受けたハーリクは、相当茶に通じている。そんな彼が珍しいという茶に、興味を覚えるなというほうが無理だ。

「東方の……？　それって、こっちでは知られてない半発酵茶とか、もしかしてもっとすごくて未発酵茶だとか!?」

「いや、さすがに移動距離が長いから、発酵茶には違いないんだけど、発酵時間が半端じゃねえの」

「おお」

これは飲まねばなるまい――否、飲まずしてなんとする、というものだ。

茶請けの菓子はないが、本当にいい茶に茶請けなど不要。

「なら、給湯室に汲み置きの水じゃ、せっかくのお茶の価値も半減しちゃうだろうから、ヌシのおばさんに頼んで、井戸からくみ上げること、許可してもらわなくっちゃ！」

ヌシのおばさん、とは寮の食堂の責任者である。

衣食住のうちのひとつの最高責任者は、寮内で絶大なる力を握っているのだ。

「まさにそれをお前に頼みたかったんだ！　ヌシのおばさん、お前には甘いもんな！」

「甘いっていうわけじゃなくて、美味しく食べてもらえるように作った料理なんだから、美味しいって言って貰えたらそれでおばさんはいいんだと思うんだけどな。おれは素直に美味しいものは美味しいって伝えて、ありがとうって言ってるだけなんだけど」

「や、そこで素直に美味しいものを美味しいって言えるのも、ここじゃあ貴重なんだって。なんったって、ここにゃあ、半端に育ちのいいやつらが揃ってるからな。自分ちの豪勢な献立とあんなにこんなにそんなに違うって、触れ回りたくて仕方ない俗物ばっか相手にしてたら、そりゃあヌシのおばさんだって、手放しで褒めてくれるお前に肩入れもしたくなるって。あいつらときたら、貴重なキノコの風味がどうとか、特別に飼育された家鴨の内臓の味わいがどうとか、特殊な魚の卵の塩漬けのえにもいえ

ない趣がどうとかって……ええい、うるさいんじゃ！　そんなに美味いもん食いたけりゃ、王立学院なんぞに入学してくるんじゃない！　って、大声で言ってやりたいとこだよな！」

充分大声で言っている――。

しかし、このときばかりは、まずいとしか言いようのない状況だった。

「ハ、ハーリクっ！」

必死の思いで、彼の袖を引いて、口を噤ませようとしたのには理由があった。

ハーリクが夢中になって、財産家出身の、やたらいばりたがる連中揃いの同級生たちのことをこきおろしている最中に、まさにその面々が近づいて来たから、だった。

王立学院は、完全なる平等な学舎――などというたい文句が、まやかしにすぎないことを、たった三カ月とはいえ、そこで暮らしてきたアマンシールは知っていた。

過剰でない限りは、私物の持ち込みは許されている寮内では、自然、実家の経済力が透かし見えてしまうのだ。そして、実家の力を――原則として、それをあからさまに誇示することは禁じられているわけだが――我が物として振る舞う人間も少なくは

ない。

将来のための人脈を築くために、力ある背後を持つ者は、そうではない有能な取り巻きを釣ろうとするし、逆に後ろ楯のない者たちは、持つ者の恩恵に与ろうと集う。

そして、今回入学した学生のなかにあって、最も富み且つ力を持ち、しかも優秀と見なされている人物が、現在彼らふたりの視線の先にいる少年というわけだった。

栗色の直毛を、肩に届くかどうかのあたりで綺麗に切り揃えた、薄茶の瞳を持つ少年の名はノーシャンという。

王都であるロスタロイドにおいて、屈指の富豪と称されるガーバンバル商社の社主の御曹司だという話だ。

入学試験を一番の成績で通過したという彼は、すでに同期入学を果たした大半の学生を、信奉者として従えているという話なのだが、ここで、ひとつ困った問題が残っていた。

なんであれ一番であらねば気が済まない気質らしいノーシャンの前で、アマンシールは寄りにもよって入寮時に、実家から持ってきた荷物をぶちまけるという失敗をし

でかしてしまい、しかもそれらの品が、彼が持っているものより上等なものだったということで、目をつけられてしまったのだ。

しかも、その後始まった授業のなかで行われた小試験で、ノーシャン以上の好成績をアマンシールがあげてしまったのがまたまずかった……らしい。

総合的な評価においては、ノーシャンのほうが優れていたわけなのだが、ある意味はた迷惑な完璧主義者である彼は、自分よりいい品を持っているだけでなく、一部とはいえ自分より好成績を上げたアマンシールにただならぬ関心を抱いてしまったらしいのだ。

正の方向ではなく、負の方向で。

すでに大きな人脈を築いている彼に、これ以上敵視されるのは、アマンシールとしてもありがたくはなく、しかもそばにいるかけがえのない友人まで巻き添えにしかねない状況とあっては、決断するのはたやすかった。

早い話が、回れ右、だ。

「ハーリク、行こう！　あんまり忙しくならないうちにおばさんに頼まないと……」



こっそり友人の袖を引っ張っての言葉に、ハーリクもすぐにうなずいた。

「……そうだな」

彼も、ノーシャンの厭味口撃にはすでにうんざりしているのだ。

無意味な面倒事の気配からは、可及的速やかに遠ざかるに越したことはない。

それでなくとも、いま現在、二人の脳裏を占めているのは、美味しい――に違いない――お茶への期待なのだ。つまらないいざこざで、それを先のばしになどするつもりはなかった。

だが、しかし。

ふたりのその判断は、ほんの少しばかり遅かった――らしい。

目敏く彼らを見とがめた取り巻きのひとりが、余計なことにノーシャンにわざわざご注進してくれたのだ。

「おや？　そこにいるのは、土産物屋の息子と、地方の成り上がりじゃないか。いい年は迎えられたかい？」

問いかける形でありながら、ノーシャンはこちらの返事など待たなかった。

「ああ、訊くほうが無理か。新年の休みすら返上して働き倒すというのが、どうやら下々がひねり出した決死の策らしいものな。国の定めた休暇すら返上する働きぶりには感心させられるが、ぼくには到底理解できないことだね。まあ、そこまでしなければ、家計が成り立たないってあたりは同情するしかないけど、ぼくなら御免だね。元日から商売するだなんて、新年を迎えるにあたっての心構えができてるとも思えないわけだしね」

強烈な、ハーリクに対する当てこすりだった。

彼の実家である土産物店は、新年の、地方から訪れる王都の虹神神殿詣での客のおかげで、かなりの利益をあげているはずだったから。

ただし、普通のきちんとした商家は、そんなことはしないというのが常識になっている。

普通、皆が休むべきときに働くという非常識をやらかすのは、流れの商人と決まっていたのだ……そうな。

そうした暗黙の決まりを、どうしたことかハーリクの実家が数年前から破りだした

こともあって、彼の実家は商業組織のなかにあっても異端視されることになったのだとかなんとか……簡単な事情はハーリクから聞いてはいたが、はたして全部理解できていたかどうかといえば、まずほとんどできてなかったとしか答えようがない。

ただ、それでもなんとなくわかることはある。

というか、ノーシャンの頭からハーリクを馬鹿にした態度に腹が立ったのだ。

回れ右——中止。

反転。

反撃。

開始。

「ハーリクのお父さんって、頭いいと思うよ、実際」

ノーシャンの言葉が聞こえているのかいないのか、微妙な場所でアマンシールは口を開く。

「おれ、正月に……田舎(いなか)だけど、神殿詣でとかしたけどさ。そんなとき、普通の店のほとんどって休んじゃってて、出てる店って、露天(ろてん)ばっかりなんだよね。お祭り騒ぎ

で楽しいんだけど、はしゃいだあとに、ふっとなにかが物足りないような気がしたりして……それで、なにが足りないのか考えたら、実はそれはいつもあって当たり前みたいに感じてる場所とか店とか空気とか……そんなもんでさ。多分、ハーリクのお父さんは、そういう言葉にできない違和感とかなんとか感じ取って、新年でも店を開けるって決断を下したんだと思うな。それに、前に見せてもらったけど、ハーリクんちで売ってる土産用の肖像画って、本当に出来いいんだもん。せっかくの新年だからって、張り切って王都に出てきたひとたちにとって、出店の出来合いのいかにもお土産、ってものじゃなくて、本当の王都土産みたいなもの、貴重だと思うんだよ。でも、お正月って、そうした店のほとんどはしまってるじゃない？　そんななかで、自分たちの多少の不自由さとかには目をつむってでも、店を開いてくれてたりしたら、やっぱり客としては嬉しいんじゃないかな？」

　多分、ハーリクのとこのおじさんは、そういうことにいち早く気づいたから、始めたんじゃないかな？

　アマンシールの言葉には、実のところ、友人とその実家を庇う以上の意味が含まれ

ていた。

しかし、悲しいかな、ノーシャンはそれをくみ取れるだけの冷静さを持ち合わせてはいなかった。

ただし、なんとなく自分の実家のやり方を批判されたような感じだけは受けたのか、攻撃の矛先は揶揄して貶めたハーリクではなく、アマンシールへと向かう。

「えらそうなこと、言うじゃないか。成り上がりの地方出身者のくせに」

成り上がりであることも、地方出身者であることも、卑下される対象と見なされることとは知らないアマンシールは「はあ?」と声を上げた。

なに言ってるんだ、こいつは!?

一発でも二発でも、鉄拳見舞ってやりたい——と、思ったときのこと。

「あれ、もしかして、お前……」

と。

割ってはいってくる者が、いた。

(え? 誰?)

聞いたことのない声だった。
そうして、声のしたほうを振り返ってみたとき、認めた相手はやはり、みたこともない相手だったのだ。
そこにたたずんでいたのは、金褐色(きんかっしょく)のややくせのある髪とハシバミ色の瞳の、少々無骨ながら整った顔だちをした少年だった。
年のころは十一二——。
(誰だろう?)
アマンシールが首をかしげるより先に、その少年は爆弾発言をかましてくれた。
「ああ、わかった! お前だろう、周囲の反対を押し切って、王立学院なんかに入学しようだなんて酔狂(すいきょう)起こした変わり種のファラスースの子供は!」
ざわり、と場が騒めいた。
こいつ、殺してやりたい、と——アマンシールは発言者を呪い殺したく思った。
けれどあいにく、そうすることは不可能だった。
発言者は、よりにもよって、この国の第二王子だったのである。

8

創世七神より人間に与えられた、天と地との間――『空』を支える力と役目を持つ柱神は、創世のころ、百八人を数えたという。

しかし人間の欲が増大し、神々への畏敬の念が薄れた時代、真っ先に犠牲になったのは、神々の恩恵の証である空を支える存在だった。

後世、暗黒時代と呼ばれる二世紀ほどの間に、彼らは次々と命を落とし、しかも後を継ぐものの出現も見られなかった。

彼らの存在の利点にのみ、目を奪われ、その存在を都合よく利用しようとしていた者たちが、己が過ちに気づいたとき、すでにその半数近くは永遠に失われていた。

柱神とは、まさに創世の神々から人間に贈られた恩寵の証にして不可侵なもの。

そうと気づかず――否、気づいたところで、己が欲得ずくで利用しようとせずにはいられない人の心のあり方が、世界を一度崩壊に向かわせたのだ。

心ある治世者たちと人々の心の指導者たちが一丸となり、『空を支える者』への尊崇の念を、人々に思い出させなければ、世界はそのとき終わっていたかもしれない。

ぎりぎりのところで、ひとは滅びを免れたのだ。

けれど、柱神の数が半ば近く減じた世にあって、人々の柱神を望む声と思いはいや増す結果となった。

なぜなら、すべての精霊の敬愛を受ける柱神が住まう土地は、例外なく人間が暮らす上で優しい場所であったからだ。

強制し、束縛するのではなく、人々は請うて柱神を招請するようになった。

そして、それに応じてくれた神の眷属が、その地を離れることがないよう、今度は強制ではなく愛情の鎖で縛ろうとし――。

彼らの近い血縁の者を、国主に戴くことを最初に始めた国がどこであったのか――それはもはや調べることはできない。

だが、それが新たな、流血の引き金となったことだけは真実である。

暗黒時代以降、柱神の代替わりの時期、ほとんど必ずといっていいほど生じる各国の王朝交代劇は、まさにその結果に他ならないのだから。

国を――あるいはその要衝の土地を、豊かに保つそのために、万が一にも、柱神たる存在が見放し居を移すことのないよう、新たな柱神が立つ度、新たな、彼らを縛る愛情の枷が立てられた。

王、もしくはかけがえのない寵姫、あるいは絶対の信頼を誇る忠臣として――空を支えるそのひとの、愛してやまない血族が。

そのことの意味を正確に理解した、野心を抱く者が誰であったかは、もはや意味を持つまい。

世界は、その人物の行為ゆえに、否応なく気づいたのだから。

すなわち、新たに選ばれた新柱神の近しい血族であれば、かなりの可能性を以て、新たな王朝を建て得るのだということに。

ディエーンはそうしたことに早い時期に気づいた結果、暗黒時代以降、何度も王朝

交代を繰り返してきた国だった。

「まったく、台無しじゃないか！」

王立学院寮の自室に戻るなり、アマンシールは思い切り、枕を壁に叩きつけて叫んだ。

八つ当たりである――が、そうでもしなければ、どうにも鬱憤が晴らせないと思ったのも事実だった。

「大体、どうして、あそこにディエーンの王子さまなんかがいるわけだーっっ!?」

まったくもって、想像もしていなかったことだった――ディエーン第二王子ケルティス殿下が、王立学院寮に出没……もとい、訪問遊ばすなどとは。

しかも、せっかく隠していたアマンシールの生家の名まで、大々的に明かして下さろうとは！

「なんだって、籍だけ置いてるはずの学院の、しかも寮になんか足を運ばれたわけだ!?」

そんな隠し玉のような危険が存在することすら知らなかったアマンシールが荒れたのも仕方のないこと……だったかもしれない。

「あー。ノーシャンのやつ、以前から王族の方と知り合いだって自慢してたって話だからな。それがケルティス殿下だったってことなんじゃないのか？　あいつんち、爵位こそないけど、国内有数の富豪だし。で、学院内でよりハクつけるためもあって、殿下を寮に誘ったってところじゃないの？　自分にはこんなにすごい知り合いがいるんだ――って」

状況をわかりやすく説明してくれたのはハーリクだった。

「あいつも、手っとり早く派閥をまとめておきたかったんだろうよ。王族の方と親しくしてることが知れたら、放っておいたって……少なくとも官吏希望の連中は、すり寄ってくるに決まってるもんなー。つまり、なんだな。地方出身の得体の知れない、でも裕福さではあっちを上回るかもしれないお前との格差ってやつを、しっかりはっ

きり示しておきたいってのが本音だったんだろうなー」

こちらが頭を抱えているというのに、なぜかハーリクは楽しげだった。

「とーこーろーが！　蓋を開けてみたら、その殿下直々が、お前の身分を明らかにしてくださったときた。予定大幅大外れーってこった。」

けけけ、とでも笑いだしそうな友人を、アマンシールは横目でねめつけた。

「ハーリク……もしかして、面白がってないか？」

ジト目で迫られた少年は、「とんでもない」と笑顔でかぶりをふった。

「でもまあ、ものは考えようってやつじゃないか。どうせお前のこと目障りに思ってるノーシャンのことだから、あのまま秘密にしてても、早晩おまえの正体暴きにかかってたに違いないんだし」

「……正体……って」

（わたしは人外の妖か……）

少々むっとしたが、アマンシールは先を促した。

学院生活を送る上で、友人のほうが世情に通じていることは、入学以来のつきあい

で、なんとなくわかっていたからだ。

「だからさ、あいつが自力でお前んちのこと調べだしてたら、絶対ないことないことの尾ひれつきで、悪ーい噂が学院内に流れてたに違いないってこと。ここの……特に官吏希望の連中は、貴族なんてろくに考える頭も持ってないって、思い込んでるというか、望んでるやつらが大半だからなー。ま、だからこそ平民上がりの官吏が政治に食い込めるわけなんだけど。ファラスースなんて名門貴族の御曹司が、実力なんかでここに入学できたはずがない――ってな感じのいやらしい噂を流してくれたに違いないだろうってことだよ」

（いやらしい噂……）

次兄の神学院における苦労話を思い出す。

「たとえば、入試に際して手心が加えられた、とか？」

「真っ先にそこを突かれるだろうな」

うんうん、とハーリクがうなずいた。

ちっとも嬉しくない同意の言葉に、兄から聞いた苦労話その二が脳裏に浮かんだ。

「教授陣とかを買収して、成績に下駄を履かせてもらう、とか？」
「そうそう」
あっさりうなずかれて、アマンシールはがっくりと肩を落とした。
「そんなことしてたら、わたしの政治や経済の授業での、二回に一度の追試なんてあり得ないことぐらいわかりそうなものなのに……」
受験のために猛勉強したものの、やはり興味のない分野に向学意欲を覚えない、彼のその傾倒における成績は、入学以来及第ぎりぎりの線を這いずっている。
その状況を知れば、誰も、アマンシールが不法に入学したなどと信じるはずもないのに——と、彼自身は思い、訴えたのだが、ハーリクの反応は違っていた。
「正論はそうなんだけど、問題はノーシャンやその一派がどう感じているか……というか、どう信じたいか、なんだと思うんだ。特にノーシャンのやつは、自分が優秀でなきゃ気がすまないやつなんだよ。出自も、在籍中の成績全部についてもな。かなわないとなったら、その理由付けを必死になって見つけるか、見つからなかったらでっちあげるやつなんだ」

熱の入った言葉に、アマンシールは（あれ？）と首をかしげた。

なにやら、ハーリク自身に、ノーシャンに対する恨みがあるような――いや、確かに入学以来、自分と親しくつきあってくれてきた彼に対し、第一学年のリーダー分にのし上がったノーシャンが自分に対するのと同じぐらいの熱意で、ハーリクに嫌がらせ攻撃を行っていたことには気づいていたのだが……あれはまさか、自分憎しの攻撃だけではなかったのだろうか？

恐る恐る、そのことを尋ねたアマンシールに、ハーリクはあっさりうなずいた。

「うん。実は子供のころ、親のつきあいで知り合いだった。まったく、ヤなやつだったぜ。おれが年頃の子供より小柄で、うまくみんなとつきあえなかったころは、親分風吹かしてやがったくせにさぁ、一度おれがあいつに独楽で勝ったとたん、掌返して総スカンなんだもんな。あいつ、そのころから全然変わってないんだもん。殿下のおかげで、ないことないことの噂の嵐とかはないだろうけど、多分……いや、きっと、陰湿なお前追い出すイヤガラセ作戦、やってくるに違いないぞ？」

どうする？

と訊かれて、アマンシールは一瞬首をかしげた。
だが、すぐに心を決めた。
目指したい道があるのだ。それを、他人の横やりで——しかも、自分より成績が上だからという理由だけで、手段を選ばずおい落とそうとするような、そんな卑怯な相手の存在ゆえに、道を曲げる必要は覚えなかった。
「あいつの気に障ろうが障るまいが、やりたいことに関しては譲らずに頑張る」
「念のために聞くけど、実家の父ちゃんや兄ちゃんに頼むつもりなんかは？」
意地の悪い、それでも答えを確信しているに違いないハーリクの問いに、アマンシールは肩をすくめて答えに代えた。
「そっか」
にやりと笑う友人に、「うん」とうなずいたアマンシールは、それでも期待を捨てきれずにこう洩らした。
「ただ、あんまり、ひどいこととかされたら困るかな……。わたしのことが知れてしまって、ノーシャンに目の敵にされてしまうのは仕方ないことかもしれないけど、誰

かが、わたしを陥れるために利用されたりするのは……まあ、いまのところは、そういうの、ハーリクしかいないわけだけど……でも、うーん？」

頭の中がぐるぐる状態になってしまったアマンシールの肩を、たたいたのはハーリクだった。

「おれのことを心配してくれるのは嬉しいけどさ、それより先に、気をつけなきゃいけないのは、お前の言動だと思うぞ？」

思いもかけない友の言葉に、アマンシールは目を大きく瞠った。

「……わたしの……？」

「それだ、それ。わたし、だなんておれたち庶民生まれの庶民育ちにしてみりゃ、いったいどこの別世界の王子様？　ってなもんだぜ。偉ぶったり生まれのよさを鼻にかけてのことじゃないのはわかってたから、おいおい注意して直させようと思ってたんだが、ノーシャンが本格的にお前のことを目の敵にしたとなったら、絶対責められる！　偉そうにだとか、上品ぶってとか、悪い噂の種に使われること間違いなし！　学院と寮内だけでいいから、その『わたし』って一人称止めろ。あ、でも僕ってのも

まずいか。坊ちゃん育ちの甘えん坊って印象が強いからなあ……」

「本来、僕とは君主に対して遜って自らを称したもので、そうした意味合いはなかったはずなんだけど……？」

わたし、は止めろと言われ、では僕かな、と思っていたアマンシールが返すと、ハーリクは鼻に皺を寄せて答えた。

「だ、れ、がっっ！　元々の意味なんかきいてるんだよ!?　ここの風潮じゃ、ぼくってのはあまちゃん坊ちゃんが使う一人称第一位なの！　だからそれは避けといて、ほかに耳に馴染んだ言い方ないのかって聞いてるんじゃないか」

なにやら喧嘩腰になっているような気がするのは……気のせいだろうか。

ただ、ハーリクは非常に面倒みがいい反面、妙なところで気が短いことを、ここ三カ月強の間に学んだアマンシールは知っていた。

だから、彼は一所懸命考えた。

耳に馴染み、且つ『わたし』や『僕』以外の一人称……となると？

脳裏に浮かんだのは、故郷の屋敷の庭師の老人のそれだった。

自然科学に興味を抱いた、風変わりなファラスース家の三男坊のことを、周囲の誰もが眉を顰め、ことあるごとに説教してきたものだ。

ところが、その庭師だけは、押しつけがましいことをいっさい口にせず、アマンシールが動植物に多大な興味を抱いていることを知ると、時間の許す限りその知識を与えてくれた。

だから……記憶をさらった時、脳裏に浮かんだのが彼であったことは、まあ、仕方のないことだったのかもしれない。

が。

だが、だ。

次に紡いだ彼の言葉に、聞いた相手は大激怒した。

「じゃあ……わし」

「どこの年寄りだ――――？」

「えーっと、じゃあ、おら？」

「ますます離れとるってんじゃ！　あー、もういい！　慣れてなくてもなんでもいい

から、わしとかおらとか言うよりも、『おれ』を覚えろ！　いいか！」

ものすごいハーリクの剣幕に、アマンシールがこくこくと頷いたことは言うまでもない。

以後、ハーリクの強烈な指導によって、アマンシールの一人称は、改まった席を除き、『おれ』に固まったのである。

この変化は確かに、彼の学生生活を変えた。

言い慣れぬ言葉回しで『おれ』といっていたのが自然になるころには、ハーリクの口利きばかりでない友人が出来ていたからだ。

そうして知り合った者たちの大半が、最初アマンシールを敬遠していた理由というのが、まさに『わたし』という一人称だったのである。

「男なら、よほどにお偉いひとしか自分のこと、そうは称さないだろう？　うちの姉貴なんて、女なのに、あたし、やあたい、はともかく、カッカしてくると思わずおれ、なんて口走るんだもんよ。こいつはよっぽどいいとこのボンボンだって、思い込んじまってなあ。いや、いいとこの出ってのは間違いなかったわけだけど、あの、そ

の、なんだ……」

言葉に詰まってしまった少年に代わって、別に友人になった少年が補足して説明した。

「おまけに、新年早々のケルティス殿下のあのご発言だろ？　王立学院には、貴族なぞなんとしたものかって気風もあったせいで、お前自身と知り合うより先に、噂が耳にはいってきてしまったんだよ。だもんですっかり踊らされちゃって……」

ここで、少しばかりハーリクが意地悪く笑った。

「たとえば、とある富豪のご子息の息のかかった……とか？」

これにははっきりとは答えず、少年は肩をすくめただけだった。

「ま、いいじゃないか。いまはそんなこと思ってやいないんだしさ」

そう言い、以降親しくなった者は少なくなかった。

とはいえ、それはまだ先の話――このときのアマンシールの前には、暗雲がたちこめていたのである……。

9

それは昼休みもそろそろ終わり、皆が午後の講義のために教室に向かっていたときのこと。

「うわあ……」

げんなりした声を上げたアマンシールの目は、渡り廊下から見える裏庭に向けられていた。

「どうした？」

またしてもなにかあったのかと――そう、悲しいことにここしばらくというもの、『何か』ばかり起こっているのだ――尋ねてきたハーリクに、ため息で答えると同時に、霜柱が融けてぬかるみとなったほうへと歩き出した。

そこにあったのは、泥まみれになった薄い帳面――綴じ紐の色からして間違いなく、アマンシールが昨日紛失したものだった。

午前中にここを通った時には見かけなかったのだから、どうしたってそれはそれ以降に置かれたのに違いない。

しかもご丁寧に中身まで泥まみれだとくれば、誰かが丹念にそうしてくれたのだとしか思いようがない。

彼の手元を覗き込んできたハーリクが、さも恐ろしげに問うてくる。

「それって……もしかして、昨日の物理の講義のときに取ったやつ？」

ハーリクのこの態度には理由がある。

昨日の物理の講義において、厳しいことで知られる教授が、その日の内容を主に、三日後に小試験を行うと宣言していたからだ。

たかが小試験と侮ることはできない。その教授は、正規の試験以外の結果も加味して成績評価を下すということで、学院内では恐れられているひとなのだ。

正規の試験ではしっかりと点を稼いだにもかかわらず、日ごろの小試験の成績が悪

かったために落第印をもらった学生もいたというのだから笑い事ではない。

こういう時、遺憾なく発揮されるはずの学生同士の助け合い精神も、いまや学年の大半を味方につけてしまったノーシャンに目の敵にされてしまったアマンシールには分が悪い。率先してノーシャンに味方していなくても、その勢力に目をつけられたら恐ろしいということで、アマンシールは現在、ほとんど孤立無援状態に陥らされていたからだ。

唯一といっていい例外がハーリクなのだが、赤茶の髪の陽気な友人は、どうにも相性が悪いということで、最初からその教授の講義は取っていないのだ。

つまり、授業内容の復習もできぬまま、小試験を受けなければならないというわけで……もはやこの時点では、誰の差し金であるかは明々白々だった。

「……なんか、やることがどんどんひどくなってないか？」

問いかけてくるハーリクに、うん、とアマンシールはうなずいた。

「この間博物初科の帳面が消えたときは、三日ほどして、探しつくしたはずの場所から見つかったんだけどね……」

それが、今回は泥水まみれときた。

しかもそれを、わざわざ見つかるような場所に放り出していたのだから、相手の悪意は疑いようがない。

そのあたりのことは、あまり詳しくハーリクに話したりはしないアマンシールなのだが、——友人もまた、自分ほどではないとはいえ、同じ人物に敵視されているのだ、彼の被害まで大きくすることは避けたかった——これ以上ことが悪辣になったら、悪戯の一言では片付けられなくなるな、とは思った。

そんな彼に、友人思いのハーリクが提案してきた。

「なあ、この先また似たようなことが続けざまに起こることのないよう、ノーシャンのやつにも口が利ける誰かに相談したほうがいいんじゃないか？」

この『ノーシャンに口が利ける誰か』に、教授陣は該当しない。

学生には学生のやり方というものがあり、なにかあったとしてもすぐに教授に泣きつくのは、腰抜けの所業と見なされ、以後周囲に馬鹿にされてしまうのだ。

もちろん、何事にも例外はあり、どうにも自分の手では解決できぬと見越したこと

についてなら、教授陣に相談を持ちかけても誰も馬鹿にしたりはしないし、その決断力を褒めさえするのだ。

ただ、いまのところ、アマンシールが受けているのは、少々タチは悪いが、あくまで悪戯の延長――と見なされるに違いない範囲なので、受けている迷惑はとんでもないのに、対処にも困るという、実に厄介な状況なのだ。

ハーリクも、そこらへんは弁えたものだから、

「だからさ、上級生の、寮監の誰かに、とか……」

新入生の間でこそ、ノーシャンは幅を利かせているが、上級生は違うはずだから――と、言ったのに対し、アマンシールはゆっくりかぶりをふった。

「駄目だよ、ハーリク。いま在学中の先輩たちのほとんどは、権門嫌いで通ってるじゃないか。ノーシャンに甘い顔を見せない以上に、おれのことはもっと嫌ってるに違いないって。なにより、そういうことを抜きにしたところで、正義感からおれのことを庇ってもらったとしても、絶対後で変な噂の的にされるに違いないんだし」

ファラスース侯爵家の三男坊が、いかに我が道を行く性格の主であるのか、いかん

せん世間には伝わっていないのだ。

だとしたら、世の中が信じるような甘ったれの貴族の子息の泣き言に、すぐに割って入った上級生――という風評が立ちかねない。

そのことを説明し、だから駄目だというと、ハーリクはしぶしぶながら引き下がったものの、なにか秘めた眼差(まなざ)しで、「でも、まさかこのままでいるつもりはないんだよな？」と、念を押してきた。

これには、アマンシールもうなずいた。

「さすがに、これ以上ひどくなったら、迷惑の度合いも違ってくるしね」

「ファラスース侯爵家とかなんだとかは別として、おれは……お前がいなくなるのは、絶対にイヤだぞ？」

念を押すように尋ねてきたハーリクを前に、アマンシールは思いがけず胸がじん、とした。

ほとんど自分の巻き添えで、同級生の大半から同じようにつまはじきにされているにもかかわらず、こう言ってくれるハーリクの心が嬉(うれ)しかった。

「うん……ありがとう」

しんみりとした思いで、そううなずいた後、アマンシールは、もしこのさき悪戯が進展した場合はどうしよう？　――という思いに耽ったのである。

その週末の午後、ディエーン王国王宮の中庭で開かれた茶会にあって、一番得意げであったのは、いまだ世間には公表されていない王女――クランクレイアだった。

彼女は嬉しそうにサボテンの鉢をテーブルに置いていた。

二週間ほど前の茶会の折、植物に詳しいアマンシールを見込んで、元気のなくなった鉢植えを持ち込み、その対処法を尋ねてきたもののひとつだったが、彼の記憶によれば、そのサボテンは、もはや回復の見込みもないほどに根腐れが進行しているもの、だった。

だから、見せられてすぐに、「手の施しようがありません、あきらめてください」

と告げたのだが……どうやら、あきらめきれずに面倒を見たのだろう。

だというのに、いったいどうしたことか。

件のサボテンは元気に復活していた。

世話する人間の愛情に応えて、死に掛けた動物や植物が息を吹き返すことがあることは、アマンシールも知ってはいたが、クランクレイアに相談を持ちかけられたときのサボテンの様子を思うと、それこそ『万が一』のことが起こったとしか思えない。

そう言えば、やはり根腐れを起こして、枯れるしかないと思った桜草の鉢植えを、見事に生き返らせたこともあったのだ。

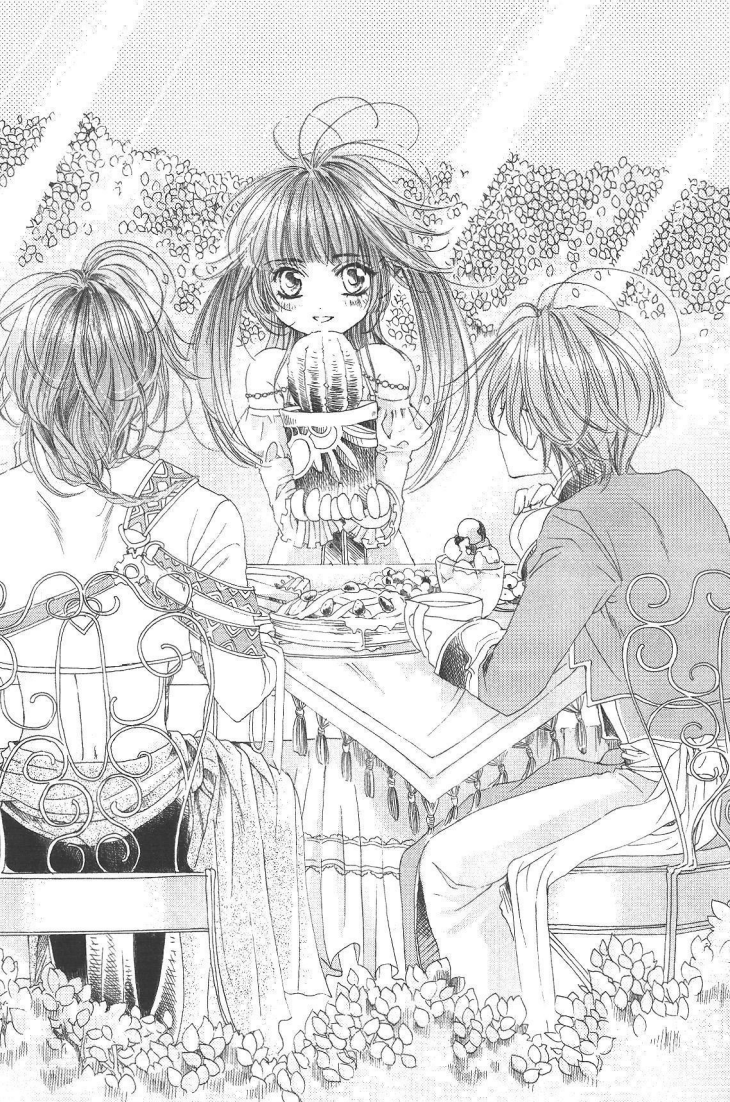
（確かにこの方は、女神の姫君と呼ばれるだけの、特別な力がおありなのかもしれない）

そう思い、彼は素直な思いで頭を垂れた。

「おさすがです」

この言葉に、クランクレイアが嬉しそうに声を上げた。

「そうであろ？　そうであろ？」



しかし、その後のアマンシールの言葉が……どうも、よろしくなかったらしい。

「さすがは、女神の姫君さま……」

と、言った瞬間、クランクレイアは眦を吊り上げ、テーブルの上にあったティーカップの中身ごとアマンシールに馳走したのだ。

淹れたてでなかったにせよ、それなりに熱いお茶の洗礼は、アマンシールにとってもありがたいものではなかった。

「なにを……！」

なさるんですか、と尋ねるより先に、小さな王女の姿は庭の奥に消えてしまった。

取り残されたのは、紅茶まみれになった少年と——もうひとり。

くすくす、くすくす、とそのもうひとりの少年は笑う。

そのひとの顔を忘れるはずがない。

それは、やはり前年の秋の週末のクラン王女とアマンシールとの茶会に、突然割って入った王子……否、王太子フィオーン殿下だった。

「……殿下？」

どういうことかと目線で問いかけたアマンシールに、彼より二歳年長の少年は、諭すようにこう告げた。

「確かにあの子には不思議な力があるけれど、ね。なにもかもがその力のおかげだと思うのは感心できないね。ライラーナの話では、あの子はそれこそ一所懸命、枯れかけた鉢植えの面倒をみていたというのだから」

はっとしたアマンシールだった。

努力あっての成果を、持ち前の不思議の力ゆえだと思われて、面白いはずがない。彼自身、その成績に関して、ことあるごとに『ファラスースの恩恵』呼ばわりされて閉口しているのだ。クラン王女は、『女神の姫君』扱いされることに抵抗を覚えている様子もなかったので、うっかりしていた。

「……軽率でした」

素直に謝罪したアマンシールに、フィオーンは「そうそう、反省しておくれ」と、突き放すようなことを言った後、じっと彼を凝視してきた。

探られるような眼差しに、落ち着かないものを感じながらも、アマンシールは目を

逸らしはしなかった。

（なんだ？）

と、脳裏には疑問符が溢れかえってはいたけれど、だ。

「……あの子が、完璧ではないことを……いや、完璧であることを望まない人間は、実に稀少なんだ。君の場合、偶然にも出会いからしてあの子の失敗から始まったものだから、いまひとつ実感が湧かないかもしれないけど……少なくとも君ぐらいは、あの子を女神云々の括弧で括ってくれては困るかな」

なにを言われているのか、正直アマンシールにはよくわからなかった。

だから、首をかしげることで、問いに変えたわけだが、フィオーンはそれ以上のことを明かすつもりはなかったらしく、わざとらしいまでの話題の転換をはかってきた。

「ところで、先日はうちの弟が考えなしなことを口にしてしまったのだって？」

どうやら、新年早々の寮内の騒ぎを耳にしたらしい。

「あ、いえ……」

思わず言葉を濁したものの、「とんでもありません」とまでは言えない正直者のアマンシールだった。

「あいつも……もう少し、場や流れに敏感だったらいらぬ騒ぎを起こしたりもしないんだろうが……」

さすがに血のつながった兄弟ということで、フィオーンの言葉には遠慮がない。

もっとも、だからといって、「はあ、ごもっともで」とも言えないから、アマンシールは返答に窮した。

「あいつは生まれた頃病弱だったこともあって、母上が、それは可愛がって育ててね、いまでは丈夫になったんだが、三つ子の魂なんとやらで、幼いころから甘やかされつづけてきたクセが抜けないで、どうも今ひとつ迂闊さが抜けないというかなんというか……」

下手に相槌も打てず、アマンシールは内心冷や汗たらたらだった。

（王家の兄弟間の問題なんて、手にあまりすぎること、家臣の年下のガキに持ち込むなー！）

本当なら、声を大にしてそう言いたかったが、もちろんそんなことができるはずがない。

仕方なく「はあ」とうなずくのがようやくの彼に、フィオーンがちらりと笑って言った。

「そのせいかどうかは知らないが、あいつは甘い言葉に弱いんだ。自分を褒めてくれる相手が大好きなんだな。そのせいで、あいつの取り巻きは増える一方だ。この年明けにも、ひとり増えたという話だが……」

なにやら生臭い話になりそうな気配を感じ、身を引きかけていたアマンシールだったのだが、『取り巻き』と『年明けにひとり増えた』という言葉に引っかかりを覚えた。

（それは……？）

思わず身を乗り出してしまったアマンシールに、フィオーンは別に得たりと笑ったわけではなかった。

彼はただ、淡々とこう続けただけだった。

「なんでも、その新しい取り巻きになった子は、足が六本以上ある生き物が、大の苦手らしいという話だ。それも、毒虫に刺されたとかいうのじゃなく、生理的に駄目なんだと。女性には多いと聞くが、男では珍しい話だと思ったものだよ。わたしなぞ、甲虫は格好良くて大好きだったからね」

　このことが、誰に関する情報であるのかは、もはや疑う余地もない。

　問題は、こんなことをあっさり差し出してくるフィオーンの真意であるのだが……それについては今は考えても意味がない、とアマンシールは割り切ることにした。

　なので、彼もうなずいてみせた。

「そうですね、わたしも大きくて格好いい甲虫を捕まえるために、夜明け前に起きて、雑木林で立派な橡の木を探したものです」

　もっとも、よほどにその生態に通じていなければ、苦労して捕らえた甲虫も早死にさせるだけだと知ってからは、無理に捕らえようとは思わなくなったのだけれど。

「わたしも、周囲の目を盗んで、早朝の庭に出かけたよ。わたしは、なんとも立派な、一本角の甲虫が大好きでねえ……」

こうと聞いては、『二本角』派のアマンシールは黙ってはいられなかった。
「なにをおっしゃいます!? しなやかな優雅な曲線を描く二本の角を持つ甲虫こそが素晴らしいではありませんか!?」
「なに!? 二本角の甲虫など、平べったい貧相な体つきではないか。やはり甲虫たるもの、一本角のように、どっしりと体にも厚みのある、安定感のあるもののほうが……」
「貧相だなんて、聞き捨てなりません! 二本角の甲虫は、自分より大きな相手を持ち上げることさえ珍しくはないんですよ!? 一本角なんて、力押しするだけじゃありませんか!」
「なんだと!?」
……この場にハーリクなり……いや、クランクレイアでもいい、いたとしたら、きっと埒もないふたりの論争にケリをつけてくれたに違いないのだが、いかんせん、いたのは給仕をしていた、はっきり言って甲虫に関してはコガネムシもカブトムシもクワガタも区別のできないライラーナだけだった。

ふたりの争いは、一時(いっとき)近くもつづいたという……。

10

可愛らしい頬を上気させ、クランクレイアは不機嫌丸出しで、ぶつぶつとこぼしていた。

「まったく、なんと気の利かぬやつなのじゃ」

場所は王宮の庭の外れ——当代柱神コーランジュの屋敷のテラスに設置されたテーブルにつき、香草茶を口に運びながらのことである。

世間は冬だが、すべての精霊に愛されている柱神の屋敷であるここは、大抵春の陽気につつまれており、庭先での茶会にはもってこいなのだ。

「褒めるにしても、褒めようがあろうに……あやつときたら……！」

お見事です——はいいとしても、「さすが、女神の姫君」というのはなんなのか。

自分が簡単に、根腐れを起こして枯れかけたサボテンを元気にしたとでも思ったのか……もしそうなら、最初から根腐れなどさせなかったはずだということにも気づかなかったというのか……考えれば、考えるだけ腹が立ってくる。

元気のなくなった鉢を目にして、どれだけ自分が驚き、不安になったか。植物に詳しいガジェス＝アマンシールに「これはもう……」と匙を投げられても尚あきらめず、庭師に対処法を尋ねて、一所懸命世話した自分の努力をなんだと思っているのか。

全部、女神の姫君の力のおかげだなんて、馬鹿にするにもほどがある。

（しかも、追っても来ないし……）

追いかけてきて、彼が自分の不用意な言葉を謝罪したら、許してやってもいいと思っていたのに、その気配すら全然ない。

気が利かないなどというものではない。

「ほんに、あいつときたら……」

ぷんぷんと、腹を立てながら、カップに残った香草茶を一息に喉に流し込んだと

き、クランクレイアは、正面に座る、コーランジュの笑みをたたえた眼差しに気づいた。

「と、当代さま？」

思わず声をかけた彼女に、それを待っていたとばかりに、当代柱神コーランジュは笑った。

「いえ、彼の者に関しては、本当にあなたはいつもとは違う反応を見せるものだと思ったものですから」

ふふふ、とこぼれる声は、初老の貴婦人といったコーランジュの外見を裏切らぬ、穏やかで優しいものだった。

「え!?　いえ、そんな……」

反論しかけたものの、途中で自信がなくなり、クランクレイアは「そうでしょうか？」と問い返した。

「ええ。昔から、あなたがここで怒りを隠さなかったことの原因は、常に同じものでしたわよ。どんなにわたくしが、そんなことはないと言葉を尽くしても、いっかな聞

き届けようとはしないのですもの。忘れるはずがないでしょう?」

その台詞が呼び水となり、クランクレイアはここに逃げ込んではぶちまけた、自らに対する不満や怒りや情けなさへの嘆きを思い出した。

『なぜ、みんなが期待するようなことができないのだろう!?　みんな、わたしが女神の姫だからこそ大切にしてくれているというのに!』

たとえば、行儀作法の授業を受けているときに失敗してしまい、教師である伯爵夫人にため息をつかせてしまったとき。

『なぜ、わたしはこんなに呑み込みが悪いのだろう……老師はきっと呆れてらっしゃるに違いない』

長年王家の女性に教育を施してきた老人が、苦笑交じりに「これは殿下には少し早すぎましたか」とつぶやいたとき。

彼らの期待に応えられない苦しさに、何度自分を責めたことだろう。

そんなとき、コーランジュがどう慰めてくれても、決してうなずくことはなかったのだ、確かに。

けれど――。

（あやつには最初から、失敗したところを見られてしまったし……）

そして彼は、自分を下敷きにして落下したクランクレイアのことを、心から心配してくれた。

お尻を打って立てないと告げたら、決して大きくはない体なのに、背負ってずっと歩いてくれた。成り行きで彼を同行し、この屋敷に近づいたことで、コーランジュに咎められたときなど、自らが悪いのだとまで言い出した。

王と女神の間に生まれた娘だというクランクレイアに、そんな風に接してくれるのは、年の離れた兄ぐらいしかそれまで知らなかったから、なんだか新鮮に感じると同時に、胸の奥がくすぐったく感じられた。

だから、父に頼んでガジェス＝アマンシールを週に一度呼んでもらうことにしたのだ。自分を普通の小さな女の子扱いしてくれる彼と話すのも、一緒に庭を歩くのも、植物採集するのも……とても、とても楽しくて。

そこまで考えたとき、クランクレイアははっとした。

（だから、なのだろうか……？）

彼が自分のことを、ほかの者のように『女神の姫』扱いした挙句、さすがだなどと言い出したときに腹立たしく思えてならなかったのは!?

（わたしはあやつに、普通の子供に対するように、振る舞ってほしかったんだろうか……？　兄上がわたしにしてくださるように……？）

そんなことが果たして――。

「……かなうだろうか……」

知らず洩らした一言に、コーランジュが優しく問いかけた。

「なぜです？」

神の眷属である初老の婦人は、いつもクランクレイアの心の屈託を的確に見抜いてしまう。

「だって……あやつは、わたしが実際に空を飛ぶことを知っておりますし……」

「ええ、そうね。たまに失敗して空から落ちることも、ね」

「あ、あんなことは、それこそ滅多にないことで……！」

「ええ、滅多にはないけれど、絶対にあり得ないわけではないことを知っているわけですわよね」

確かに、出会いが出会いであったせいか、ガジェス＝アマンシールは、クランクレイアが風霊の力を借りて空を飛ぶことにいい顔をしない。

ひとによっては、自分も連れて飛んでみてほしいと願い出ることもあるというのに、だ。

「あ、でも、最初にわたしが落ちたのを知っているから、危ないと思っているだけなのかもしれない……」

意地になって否定してみるが、コーランジュは本当にクランクレイアが望んでいる答えを間違えたりはしなかった。

「なら、あなたがひとりで飛ぶことにまで、うるさく口出しはしないでしょうね。それに、クラン。あなたはなぜ、すぐに追って来ないのかと腹を立てているようだけれど、あなたが先ほどここを訪れた方法を忘れているのではなくて？」

因みに、今回もまた、風霊に頼んでの、空からの訪問だった。

言うまでもないが、人間の足よりよほど、風霊のそれは速い。
すぐに追いついてくることなど、ガジェス＝アマンシールには不可能なのだ。
しかも、である。
（確か、あのときあやつは庭で迷ったとか何とか……）
言ってはいなかったか？
半分異界と化した、このコーランジュの屋敷の近くであればともかく、出会った場所は異界とのつながりなど皆無の、ただの王宮の庭の一画で――。
そう言えば、
（故郷でも何度も、迷った挙句に野宿したことがあったとか……）
言ってはいなかったか？
いや、確かに聞いた。
となれば――。
（まさか、あやつ、わたしを捜すつもりで庭に出て、逆に迷子（まいご）になっているのでは）
なかろうな――と、思ったときのこと。

上品な初老の柱神は、さもいま気づいたとばかりに、そっと目を細めてこう告げた。

「あら？　屋敷の結界の周囲を歩き回っている気配があること。誰かしら？　わたくしが肯じない限り、何者もこの屋敷の敷地内に入りこむことなどできやしないのに」

間違いない、と思った。

がたん、と音をたて、席を立ったクランクレイアは、食い入るような目を屋敷の女主人に向け、「どのあたりですか!?」と問いかけた。

この振る舞いを無礼とも咎めず、コーランジュはあっさりと教えてくれた。

「ええ、『夏』の区画よ……槿の花が咲いているから」

「ありがとうございます！」

そのまま飛び出しかけ、足を止めたクランクレイアは、振り返ってこう尋ねた。

「当代さま。今度、あやつを一緒に連れてきてもかまいませんでしょうか？　それで……そのとき、ただでさえ迷子になりやすいあやつが、王宮の庭で迷った挙句力尽きたりしないように……その」

この屋敷への出入りの許可を、彼にももらえないか――と言外に頼んだクランクレイアに、屋敷の女主人は嫣然と微笑んだ。

「今度は、きちんと先触れを出して、ね？　ただでさえ少ないお客さまなのだから、楽しんでもらえるよう、準備しておきたいものですからね」

「感謝します！」

叫んでクランクレイアは駆け出した。

コーランジュの言ったとおり、槿の木のそばで、求める相手の姿を見つけた少女は、心から溢れかける温かいなにかを無理やりおしこめ、「呆れたやつ。また迷子になったのか？」と冷ややかに話しかけた。

対するアマンシールの答えときたら――。

「はあ、野宿するのは覚悟の上でしたが、三日のうちに誰かに見つけてもらわないことには、落第するしかないところだったので、途方にくれてました」

だった。

それは、前期試験直前に起こった。

「ない」

机の引き出しという引き出し、本の間という間、さらにはかばんをひっくり返した後のアマンシールの呆然としたつぶやきに、ただならぬ気配を感じ取ったらしいハーリクが、もはや珍しくもない問いかけを放ってきた。

「……今度は、なにが？」

アマンシールはややぼんやりしているものの、しょっちゅう持ち物をなくすほど迂闊ではない。

ところが、ここのところ、物を紛失してしまうのには理由がある。

先日の授業の帳面もそうだが、授業に必要なコンパスだとか分度器だとか直角定規だとか……最近では貴重な辞書まで被害にあったばかりだ。

しかも見つけたとき、辞書は水性の糊で数ページごとべったり貼り付けてあったお

かげで、印刷を損なわずにきれいに剝がすのには、相当な忍耐と時間を要したものだ。

つまりは、なくしたというよりは隠された、あるいは盗られたと呼ぶべき事態で、辞書の糊付けは悪質としかいいようがなく、そろそろ黙ってばかりもいられないか——と思っていた矢先のことだった。

顔色を変えて捜すアマンシールの様子から、相当大変なものがなくなったのだろうと思ったらしいハーリクは、恐る恐る「じ、辞書より貴重品……？」と尋ねてきた。

アマンシールは答えず、とりあえず、ほかの場所も捜してみ、結果、なくなったものがひとつでないことを知り、深い息をついた。

「おい？　どうした？」

心配そうに声をかけてくる友人に、今度ばかりは「大丈夫」だと強がりを言う気も失せて、アマンシールは投げやりに答えた。

「辞書ほど貴重じゃないけど、いまの時点では……おれにとっては辞書以上の被害かな。三日後提出の世界史の小論文の清書したぶんと下書きの原稿全部……」

なくなっていた。

聞いて、慌てたのはハーリクのほうだった。

「ちょっと、待て！　確かお前が取ってるセーロン教授の世界史は、試験開始前に小論文として提出することで、試験代わりに単位をくれるって条件じゃなかったか!?」

うん、とアマンシールはうなずいた。

「代わりに、よほど出来の悪いやつと、不提出のやつは無条件で落第」

「じゃあ、大変じゃないか！　早くやつらの一味をとっ捕まえて、少しでも取り返さないと！」

ハーリクの主張はもっともだったが、アマンシールはもう、手遅れだろうと思っていた。

案の定、ハーリクの人脈のおかげで件の実行犯が見つかったとき、書きかけの小論文も、その下書きも、とっくに焼却炉に放り込まれていたことがわかった。

しかも、同じ内容を書くために、資料とするべく貸し出しを頼んだ書物はすべて貸し出し中ときた。

「ねえ？」

このときになって初めて、アマンシールはハーリクに相談を持ちかけた。

「ここまでやられて尚、放っておくのは、かえってまずいんじゃないかと思うんだけど？」

ハーリクは、待ってましたとばかりに、アマンシールの背中をばんばん叩いた。

「いつ、そう言い出すかと待ってたぜ！」

そうして、赤毛の少年は、協力する気満々で、アマンシールの顔を覗き込んだのだ。

対してアマンシールはにやりと笑っただけだった。

「なんだこれ、なんだこれ、なんだ――!?」

王立学院寮内に、夜中、悲鳴が上がった。

その声のあまりに凄まじさに、寮生の命に関わる大事かもしれぬということで、一般の警邏兵まで一緒になっておしかけたその先で見たものといえば……だ。

がくがくと、寝台から落ちた状態で「それを殺せ！　いや、つぶすな！　いいから、それを……そいつらを放り出せ！」と、寝台の中にたむろしているコガネムシや蜘蛛や蛾やムカデを指差し、恐慌状態に陥っていたノーシャンの姿だった。

誰が、彼の寝床に、虫を送り込んだのかはわからない。

ただ、彼のそれまでの所業から、「ざまぁみろ」と思った人間はやまほどいたという話である。

II

それは、短い春の休暇を終え、学院生活も楽しいものに変わりかけていた春の日のことだった。

いつものように、週末の午後、王宮に赴いたアマンシールは、クランクレイアが急の不調で寝込んでいることを、ライラーナではない別の侍女から聞かされた。

（珍しい……）

と、思った。

なにしろ元気いっぱいの女神の姫君は、真冬に厚手の外套もなしに外を出歩き、それで風邪ひとつひかない健康そのものの少女だったからだ。

とはいえ、春とはいえ、夜はまだ冷えるこの時期のこと、かえって気が緩んだのか

もしれないと思い直したアマンシールは、あまり話したことのない侍女に、見舞いがかなうかどうかを尋ねた。

すると、なぜか侍女は困った顔になり、

「い、いえ……その、殿下は、床についた姿をお見せしたくはないと……」

と、答えた。

普通の深窓の令嬢であれば、至極当たり前の返答なのだが、アマンシールは腑に落ちないものを感じた。

以前、茶会の席で、クランクレイアが数少ない寝たきり生活のことを語った際——因みにそれは、病ではなく、木から落ちて足の骨を折ったせいだったらしいのだが——苦虫を噛み潰したような顔で、

『あのときは、まったくまいった。見舞いの客はみな、御身大事にとかなんとか、同じようなことしか口にせぬし、土産も花や果物ばかり。一の兄上が遊戯盤や書物を差し入れてくださらなかったら、それこそ退屈で死んでいたところだ』

といっていたのを覚えていたからだ。

『もし今度、わたしが寝込むようなことがあったら、ガジェス、そなたは花や果物や菓子などというつまらないものを持ってくるのではないぞ？　そうだな、遊戯用の絵札とか、ひとりでも退屈しないような書物がいいな』

とも言っていた。

そんな彼女が、弱った姿を見せたくないとか言うとは思えなかったのだが、怪我をして寝台に縛りつけられるのと、体調を崩してそうなるのとでは、きっと違うのだろうと、彼は自分に納得させた。

「そうですか……では、日を改めまして、お見舞いさせていただくことにします」

そう応じたアマンシールの態度に、侍女はほっとしたようにうなずいた。

「ええ、是非、そうしてくださいまし」

これも、なにかが引っかかった。

（なにか、おかしい……？）

だが、その引っ掛かりがなんであるのか摑めない。

胸がもやもやするのに、思わず眉宇をひそめたアマンシールの様子には気づかなか

ったのか、侍女はそっと声を殺してささやきかけてきた。

「それにしても……名門ファラスース家のご子息が、あの姫君のお相手とは……さぞ、気苦労が絶えぬことでございましょうね。心中お察しいたしますわ」

思いもかけぬその言葉に、はっと息を呑んだのを、どう誤解したものか、侍女はさらにこう続けた。

「陛下も、姫君を不憫に思われるのはわかりますけれど、おかげであのように破天荒な性格に育ってしまわれて……それを押し付けられる身としては、たまりませんでしょう？」

ちらりと意味ありげに笑われ、アマンシールの眉間の皺はより深くなった。

（なにを言いたいんだ、このひとは!?）

まるで、これでは自分がいやいやながらクランクレイアにつきあっているかのようではないか——いや、確かに王に言いつけられた当初は、義務を果たすつもりで顔を見せていたわけだが、いまでは違うことぐらい、わかってもよさそうなものだ。

（大体、嫌ってる相手と仲良く泥まみれになって、植物採集などするか！）

自然科学が大好きなアマンシールにとって、この王宮の庭は宝の山なのだ。
学院の授業がなければ、一日どころか二日でも三日でも……かなう限り歩き回りたいぐらいだ。そんな貴重な時間を、クランクレイアとともにしても苦痛に感じないのは、彼女のことが好きで、しかも一緒にいるのが楽しいからにほかならない。
だが、目前の侍女は、そのことに関しても大いなる誤解を抱いているようだった。
「高貴の身といいながら、あのように土と親しまれるだなんて、とても信じられませんわ。言ってはなんですが、お里が知れるというものですわね。お付き合いなさるのは、本当に大変でしょう?」
同情たっぷりの侍女の言葉に、アマンシールのむかむかは限界に達した。
(土に親しんでなにが悪い!? なにより、お里が知れるってなんだ!? しかもわたしのことを勝手に誤解してるし!)
侍女の言葉の表裏から察するに、自分はまるで国王の命令でいやいや王女につきあって、好きでもない土いじりまでやってる、まるで下僕(しもべ)ではないか。
(腹立つ!)

感情を隠そうともしないアマンシールの表情と気配は、鈍感な侍女すらも怯ませるに充分な迫力をたたえていた。

「では、今日はこれで……ただ、庭のほうを散策させていただきます。お許しは、陛下からいただいておりますから」

かまいませんね？　――と目線で尋ねたところ、侍女はこくこくとうなずいた。

（まったく……なんなんだ、あの侍女は……!?）

むかむか、ぷんぷんして王宮の庭園に出たアマンシールは、いつもならすぐに夢中になる植物群にも目もくれず、あてどなく庭を歩き回った。

そうして、ようやくわけのわからぬいらいらが晴れかけたころのこと――。

アマンシールの耳は、小さな、小さな声を拾った。

そこは、柱神コーランジュの屋敷の結界に程近い一画――。

少し早い卯の花が咲いていた。

その白い小さな花に抱かれるようにして――。

幼い少女が、泣いていた。

体を小さく縮めるようにして、それでもなお声が外に洩れないように口に手を当てて——全身を震わせながら、泣いていたのは……。
体調不良で床に伏しているはずの、クランクレイアだった。

はらはらと、卯の花が散っていた。
風もないのに、白い小さな花びらが、涙のようにはらはらと散っていた。
そして、その下に、蹲るようにして、肩を震わせるクランクレイアの姿を認めたとき、アマンシールは胸がしめつけられるような思いを味わった。
（なぜ彼女が……）
あのように声を殺して泣いているのか。
いや、なぜあんな風に泣かなければならないのか。
なぜだか、猛然と腹が立ってきた。

もしかしたら、先ほどの侍女とのやりとりで燻っていたいらいらが再燃したのかもしれない。

（なんだってあのひとは、こんなところで、あんな風に泣いたりしてるんだ!?）

よっぽど回れ右してそ知らぬ顔を通そうかとも思ったのだが、あまりにも彼の知っているクランクレイアと違いすぎる彼女の様子ゆえに、立ち去ることはできなかった。

そっと足音をしのばせ、彼はクランクレイアに近づいた。

そうして、肩を震わせつづける少女に声をかけたのだ。

「なにを、らしくもない風情で泣いてらっしゃるのです？　あなたとも思えない……いったい、どうなさったというんです？」

さりげない口調で声をかけると、クランクレイアはびくりと肩を強張らせ、恐る恐るといった風に振り返った。

明らかに、この場に自分以外の誰かが来ることなど、想像もしていなかった様子だ。

そして、その相手がアマンシールだと気づいた瞬間、少しだけほっとしたような顔になり、すぐに自分の泣き顔を思い出したのか、ぐい、と乱暴に袖口で目元をぬぐった。

「なんでもない！」

答える声は、どこまでも強気だった。

（そんな真っ赤な目をして、どこが「なんでもない」んだか……）

「どこがなんでもないんですか。全然そうは見えませんよ」

呆れたように言うと、クランクレイアはかっと赤くなった。

「なんでもないと言ったら、本当に何でもないんだ！　ほうっておいてくれ！」

「だから、そんなことこそできませんったら。部屋で休んでらっしゃるはずのあなたが、こんなところにいるというだけで、いまごろ、どれだけの方々が捜しまわってらっしゃることか……」

と、そこまで言って、不意にアマンシールは先ほどの取次ぎに出てきた侍女の不自然な態度を思い出した。

見舞いの断りに、あっさり応じた自分に見せた、あからさまに安堵した顔、さらにはその後の、同情したそぶりでの間接的なクランクレイアに対する遠まわしな非難、中傷。

（もしかして……？）

と、アマンシールははたと気がついた。

（わたしは、彼女に好意的なライラーナと話す機会が多かったから気づいてなかったけれど、あるいは王宮の侍女のなかには、先ほどの彼女のような女性が少なくないんじゃないのか？）

さも、クランクレイアに問題ありげに、誰彼かまわずにささやきかけるような人物が。

確かに、彼女の出生に関しては、アマンシールも眉唾物だと思っている。夢で逢瀬を重ねた女神が、ある日突然子供をつれてきた——というのは、あまりにも滅茶苦茶すぎる。

だから、彼はもうひとつの噂——国王が、公にはできない女性との、公にできな

い恋の結果として得たのがクランクレイアである……という説を、半ば以上信じていたわけなのだが。

（けれど、実際そばに仕えている人間が、その手の問題を面白おかしく噂していいはずがないだろうに……）

縦んば譲って、噂話に興じるところまでは仕方のないこととしても、だ。

それが、噂の渦中にあるクランクレイアの耳に届くというのは問題ではないか。

アマンシールの胸の奥で、むかむかいらいらはどんどん大きくなっていった。

一度は振り返ったものの、またしても顔を背けたクランクレイアに、だから、こんな風に問いかけてみた。

「もしや、どなたかに苛められでもなさいましたか？」

反応を見られるのがイヤなのか、かたくなに背を向けたまま、少女は否定した。

「馬鹿を言うな！　女神の娘たるわたしに、危害を加えるような者などおるわけがないであろうが！」

威勢はよかったが、正面きっての啖呵でなかったのは、ある意味致命的だった。

「では、誰かに意地悪を言われたとか、あるいは陰口を叩かれたのを偶然耳にしてしまったのだとか……？」

おおよそのあたりをつけての問いかけに、クランクレイアは答えるまでに多少の間を要した。

「……そんなことはない」

どうやら大当たりだったらしい。

（にしても、勝気な彼女をここまで打ちのめすだなんて、いったいどれだけ責めさいなんだんだか……）

なのに、甚振られている当人ときたら、そう扱われても仕方ないと、自ら思っているきらいさえあるときたものだ。

なぜ、彼女が、そんな遠慮をしなければならないというのか。

クランクレイアの真実の出生についてなど、知りはしない。自分は現実の彼女を知っているだけだ。

おおらかで奔放で、けれど小さな者の痛みにも敏感に反応する……かけがえのな

い、愛しき子供。

じっと耐えているのがわかるだけに、胸の奥にいろいろと感情がわきあがってくる。

「隠しても無駄ですよ。ほんの小さな棘だって、ひとの命を奪うことはあります。あと、取るに足らないものだって、山と積もってはね」

それでも強情な王女は、「聞きたくない」の一点張りだった。

が、つづけたアマンシールの言葉には、気が引かれたようだった。

「かく言うわたしも、貴族出身であることが知れましてからは、けっこう嫌がらせをうけたものですよ。いつぞや話したハーリクのように、みな気がいいやつばかりではありませんからねえ……」

しみじみした口調で、彼は受けた被害がどんなものだったかをひとつひとつ説明した。

「ですが、さすがに提出期限三日前に、書きかけの小論文の清書したものと下書きがなくなったときには心底まいりました。おまけに資料に使った本まで全部貸し出し中

になっており、あのときは、本当に落第の危機でしたね」

泣く声は、やんでいた。

大きな紫色の瞳に、心配そうな色をたたえた少女は、真っ直ぐにアマンシールを見上げ、問いかけてきた。

「そ、それで、どうやって切り抜けたんだ？」

自分の心の痛みより、他人の危難を心配してしまう――表面しか見ようとしない人間の目には触れない、どこまでも優しい少女がそこにいた。

（いい歳した大人が、こんな小さな子を苛めるなんて……いや、多分そんなつもりさえないんだろうな。好き勝手に噂話に興じてるだけだと、そいつらは言うんだろうし、それがこの子の耳に入ったことさえ、行儀が悪いとかで片付けるに違いないんだ……）

アマンシールの怒りはいや増すばかりだったが、それをクランクレイアに見せたりはしなかった。

彼女の笑顔を取り戻すことが、このときの彼にとっては一番大事なことだったの

だ。

「幸い、書きたい内容は頭に入ってましたし、下書き以前の書付は残ってましたから、目の下に隈を作って、ぎりぎり提出することができましたよ。ただ、これ以上悪質ないたずらがつづいては困ると思ったものですから、少々仕返しすることにしたんです」

その内容は、もはや言うまでもないことである。

布団のなかに、大量の虫を送り込まれたノーシャンのあげた悲鳴は、それはそれは凄まじいもので——。

「耳にしたときは、胸がすっとしたものです」

淡々と説明したアマンシールの前で、クランクレイアは堪えきれぬとばかりに吹き出した。

「それでは……子供の悪戯そのものではないか。そんなことで、本当に嫌がらせはやんだのか？」

尋ねる少女に、彼は大きくうなずいた。

「ええ。この場合、悪戯だったからこそ、効果が大きかったんです。特に、女性と違って、男が虫を怖がるのは恥ずべきことだという風潮がある上に、実は集めた虫のなかには、甲虫が好きな者なら、垂涎ものの大物を、二三匹混ぜてまして……」

クランクレイアの口利きもあって、季節などほとんど関係ない『当代さま』の屋敷への出入りを許されたアマンシールは、屋敷の主であるコーランジュに許可を貰った上で、敷地内に生息するカブトムシとクワガタムシの大物を捕まえ、件の虫のなかに入れておいたのだ。

ノーシャンの悲鳴に、何事かとかけつけた同級生は、ムカデや蜘蛛には顔を顰めたものの、一緒にいた大カブトムシやヒラクワガタ、ノコギリクワガタには目を輝かせ、そんな『宝物』にさえ、嫌悪と恐怖を隠そうとしない寝台の主に見切りをつけた、というわけだ。

「おかげで、相手が騒ぎ立てれば立てるほど、周りが冷めていきまして、それに気づいた当人も、これ以上騒ぐのは割りにあわないと思ってくれたようです」

実際は、見事な大物の甲虫を目にし、欲しがってハーリクを通じて話を通してきた

連中に、融通してやったという裏話もあったのだが、そのへんのことは伏せておいた。

「なるほど……同じような陰湿な嫌がらせで返したら、泥仕合にしかならないが、子供らしい悪戯なら、後をひかぬということだな。だが……男なら、それでもいいが、女性が相手となると、虫嫌いはぜんぜん恥でもなんでもない上に、そこを突いたりしたら、まず間違いなく恨みに思われようし、どうしたら……」

と、考えこみかけた少女ははっと息を呑み、

「ち、違うぞ！　わたしは別に虫を使った報復なぞ、考えてや――」

いない――と、いうつもりだったようだが、アマンシールは気にもしなかった。彼女の紫水晶の双眸に、いつもの力ある輝きが戻っていた。

彼には、それだけで充分だったのだ。

12

はらはらと、卯の花が、白い雨を降らすなかで、声もなく泣く少女の姿を見ているのがイヤだった。

本当に、それだけだったのだけれど、彼女が笑顔を取り戻したとき、それこそが似合う彼女を泣かせた相手に対する怒りが、アマンシールのなかに湧き上がった。

自分のそれを彼女が取り上げるかどうかはわからないが、もし、却下されても、別のやり方はあると思ったから、彼は軽い口調で提案してみた。

「芙蓉など、もってこいだと思いますよ？」

ささやきとともに、送り込んだ毒気にも気づかぬ顔で、クランクレイアは真っ正直に問い返してきた。

「芙蓉とは、蓮の花のことか？　それとも夏から秋にかけて木に咲く、薄紅色の美しい花のほうか？」

なるほど、芙蓉とは蓮の花の別称でもあったと思い出し、相手の歳にも似合わぬ博識ぶりに感心しながら、「後者ですよ」とアマンシールは答えた。

「なるほど。しかし、なぜここで芙蓉が出てくる？」

心底不思議がる顔をしている彼女は、どうやら本当に知らないらしい。

黙ったまま、復讐を遂げさせてもいいかな――と、一瞬思ったものの、あとでばれたときに、あれこれ責められることを考えた場合、一応説明しておいたほうがいいかもしれない、と思い直した。

「このあたりではどうか存じませんが、南方では芙蓉の葉には、大型の蛾の幼虫が巣くうものだと聞き及んでおります」

その蛾の羽を広げた大きさときたら、大人の両掌をあわせたほどもあって、しかも異様に綺麗なペパーミントグリーンの色彩だものだから、違和感の大きさときたらないのだという話。

「当代さまの庭先で見つけた、このあたりでは珍しい花の苗を、日ごろ世話になっている侍女たちにお贈りになっても、誰も不満はおっしゃらないと思いますよ。しかもその苗に、虫の卵が産み付けられているだなんて……誰も想像だにしないことでしょう？」

その提案には心動かされるものがあったのか、ぷっと吹き出したクランクレイアだったが、すぐさま首を左右に振った。

「いや、いかん。いかんぞ！」

断固として言い切った。

「わたしは違うが、世の大抵の女子は、虫を苦手にしているのだもの。そうと知っていて、苛めるようなまねは出来ぬ」

（自分が苛められる分はいいのか。どこまでお人よしなんだか！）

だが、そんな彼女だからこそ放っておけないのかもしれない。

「大丈夫ですよ」

と言い、彼はクランクレイアを安心させるように笑った。

「姫君自らが掘りだし、鉢に移したものを、心底大切にするつもりのある者なら、きちんと手入れするはずです。手入れを怠った者の鉢に虫が発生したとしても、それは自業自得というものです。実際、芙蓉の花は美しいのですから、贈られたほうは喜ぶと思いますよ？」

この言葉に、ついにクランクレイアは声を上げて笑い出した。

「ジェスは唆すのが上手いな。うっかりその気になるところだった」

こんなに小さいのに、なにもそんなに我慢することはなかろうに――そうは思ったが、これ以上の口出しは無意味だと思い、彼は「そうですか」と引き下がった。

「その悪戯は、本当にどうしようもなくなった時のために取っておこう」

そうして、にっこり笑ったクランクレイアの紫の双眸は、きらきらと輝いていた。

「ジェスは……まるで、三人目の兄上みたいだ」

王家に、王子はふたり――。

（兄代わりか……）

週末の午後の茶会で、たまに顔を合わせるフィオーン王子は、彼女より六つ年長だ

ったはずだ。

大人になれば、さほど気にするほどでない年齢差とはいえ、幼いころにはその差は大きい。まだしも四つ年上の自分のほうが、気安く振る舞えるのかもしれない。

そう思い、納得したアマンシールは、なぜか胸の奥に走った小さな痛みに首をかしげた。

もっとも、その意味を考えるより先に、別の、小さな疑問が湧き起こったものだから、すぐに忘れてしまったのだが。

（あれ？　だけど歳が近いというのなら、ケルティス殿下はわたしとひとつ違いだから、親しくしてもおかしくないはずだけど……茶会で顔を合わせたことはないな）

尋ねてみようかとも思ったが、なにか支障があった場合、せっかく取り戻した彼女の笑顔が翳ってしまうかもしれない――と思うと、踏み切れなかった。

だから、代わりにこう告げた。

「わたしにとりましても、あなたは目の離せない、心配で仕方ない妹のような……家族のようなひとですよ。……畏れ多いことですが」

一瞬、クランクレイアの眼差しが揺らいだ。
（なにか、まずいことでも言ったか？）
自問するアマンシールを余所に、クランクレイアは悲しげとも寂しげともつかない笑みを浮かべた。
「ちっとも畏れ多くなんかない。だってわたしは、女神の産んだ娘なんかじゃないし、王女でもないんだから……みんな、あからさまには言わないけど……知ってる。わたしは……多分……叔母上の……」
続けられた言葉は、ささやきよりも小さな声だったにもかかわらず、どんな鋭利な刃よりも鋭くアマンシールの胸を突き刺した。
――不義の果てに生まれた子供だと思うから……。
全身の血が沸騰するかと思うほどの怒りが胸を支配した。
（なんてことを聞かせるんだ!?）
子供にとって、両親というのは特別なものだ。
家族と血がつながっているかどうかは、それこそ夜も眠れないほどの一大事だ。

暢気者と周囲のみなが口を揃えるアマンシールですら、幼いころから兄たちとは違い、政治や経済に一片の興味も抱けない自らの資質がどこから来たのか――少なくとも両親からではないことがわかっていたので――疑い、それなりに不安に思ったものだ。

もっとも、だからと言って、兄たちや父と同じようになろうとは露ほども思わなかったあたり、どこまでも我が道を行く性格は筋金入りだったわけだが。

それでも母が、「お前ときたら、本当に大叔父さまにそっくり。興味を覚えたことには寝食を忘れて没頭するくせに、そうでないことには指一本動かそうともしないのですもの」と溢す言葉を耳にした時、自分でも意外なほど、ほっと安堵したのを覚えている。

自分の居場所を自ら作り上げるだけの力のない幼い子供にとって、それを保障してもらうことは何にも代えがたい特別なことなのだ。

なのになぜ、大人はそうした自分の子供のころのことを、容易く忘れてしまうのか。

こんなにも小さな子供の耳に入るようなところで、なぜそんな無神経な話題を持ち出すことができるのか。

猛烈に、腹が立った——はっきり言って、先ほどの比ではないほどの怒りを覚えた。

（こんなひどいことを、彼女の耳に入れたのは、きっと……）

先ほどの侍女の顔が脳裏に浮かんだ。

まず、間違いはないはずだった。

そして、まさにこのとき、アマンシールの脳裏では、クランクレイアに対する心ない態度を取ったに違いない侍女、女官に対する報復計画が練り上げられていたのである。

（芙蓉の計画は、話してしまったから駄目だな。鉢植え関連は、聡い彼女に気づかれる危険があるから止めておいたほうがいいか……）

一見したところ、暢気者にしか見えないアマンシールだが、先日ノーシャンをやりこめた手口からもわかる通り、実はけっこう……いや、かなり、敵に回すと厄介な性

格の主だったりするのだ。

クランクレイアの心を傷つけた、数人の大人が、後日自ら職を辞した際、とぼけた顔で「そうなんですか？」と彼は問い返しさえしたわけだが、わかるひとにはわかってしまったらしく、だがそのひとは味方だったので、騒ぎとして取り上げられるようなことはなかった。

ほかにも理由はあったが、アマンシールはフィオーン王子のことが、大好きになった。

それは季節が初夏にさしかかるころの――休日の朝。

アマンシールは王宮を訪れ、クランクレイアではなくフィオーン王子に面会を求めた。

先触れもなしの訪問など、本来言語道断のことだったが、顔見知りであることを加

味してもらえたのか、一時と経たず、王子の私室に通された。

「珍しいこともあるものだ。わたしと会いたいなら、妹に伝言するなり、侯爵に口利きを頼むなり、いくらでも方法はあったはずだが……？」

それは――と言いかけ、アマンシールは理論武装を放棄した。

少なくとも、この相手であれば……しかも、問題となっている人物のことを考えれば、きっと許してくれると思ったのだ。

綱渡りだ。

わかっている――とてつもなく危険だということは。

それでも、この相手以外に、この問題をもちかけるわけにはいかないという、強固な確信があった。

「失礼は承知で、まかり越しました。どうしても、殿下の口から聞きたいことがありましたものですから」

「畏まって……いったい、なんだ？」

問いかけてくる王子のほかに、部屋には三人の侍従がいた。

フィオーンの世話をするだけでない、いざというとき、彼を守るために控えているのに違いないと思ったが、アマンシールはあえて、「お人払いを……」と願い出た。
「彼らはみな、わたしが信用する者たちだ。それでも……？」
「それでも、です」
と、彼は応じた。
「わたしではない方の名誉に関わる問題ですから」
その一言で、フィオーンは察したのだろう——あっさりと室内の三人を退出させた。
多分、すぐそばで待機しているのだろうが、それでも自分の言葉を受け入れてくれたフィオーンの心が嬉しく、また声を潜めることで、室外には聞こえない環境を許してもらえたことがありがたかった。
「これで、いいかな？」
確認を取るように、問いかけてきた王子に、感謝をこめてアマンシールはうなずいた。

「ありがとうございます」

「礼はいい。わたしは、人払いまでして、お前が話したがっている内容に興味がある。いったい、何事だ？」

その声は厳しかった。

以前茶会で同席したおりの、親しみやすい声音とは、全然違っていた。

恐ろしいとさえ感じた。

父であれ、兄たちであれ、こんな風に、向き合うだけで気おされたことはなかった。

これが王の……次代の王となるものがたたえる気配なのか。

王とはこれほどに、特別な気を纏っているものなのか。

くじけそうになる心を必死に持ちこたえて、アマンシールはフィオーンの目を真っ直ぐに見つめた。

言葉を口にするために、思いがけぬほどの力がいった。

「先日、姫が庭先で泣いてらっしゃる姿をお見かけしました。姫はいつもと同じく強



情でらっしゃいましたが、よほど心弱くなっておいでだったのか、心無い女官たちの噂話をちらりと洩らされました。そのお姿があまりにも痛々しく……」

丁寧な態度を保つのも、そこまでが限界だった。

アマンシールは思い切って口にした。

「姫は、御自分の生い立ちのことで、深く悩んでいらっしゃいます」

空気が瞬時に凍った。

フィオーンの眼差しを正面から受け止めながら、喉がからからに渇くのを感じた。

こんなにも、誰かの視線を恐ろしいと感じたことはなかった。

それは、怒りではなかった。

殺気と呼ぶのが一番近かったかもしれない。

沈黙が、その場を支配する。その間、はたしてどれほどであったのか……。

不意に、抑揚のない王子の声が耳に届いた。

「それで――」

彼の紫の双眸から、先ほどまでの恐ろしい光は消えていた。

だが、その全身から放たれるぴりぴりとした緊張感はいや増すばかりで、息をするにも努力が要った。

「我が妹の生い立ちとやらに関する、下らぬ風評の真偽を確かめるべく、事情を知りそうな人物を訪ね回っているというわけかい？」

その声は、聞いているだけで心臓が凍りつきそうになるほど、冷ややかなものだった。

圧倒され、言葉を飲み込みそうになるのを必死に堪え、アマンシールは尚も突っ込んだ。

「本当に、下らぬ風評なのですか？」

真っ直ぐに、切り込む。

出会って半年あまり――その時間を短いとも長いとも決め付けることはできない。けれど、クランクレイアは精霊の声を聞き、またその力を貸してもらえるほどに、彼らに愛されている少女なのだ。

ただの悪意に満ちた噂や推測などで、あれほどに傷つくとは思えない。何しろ、誠

実さにかけては、残酷なまでに人間より遥かに勝る精霊たちがそばにいるのだから。

例えば、彼女が精霊たちに問いかけるとする。

『わたしは本当にお父さまの娘なの？』

精霊たちが是と答えたのなら、彼女はあんなに不安がっていなかったはずだ。

あるいは、彼女が精霊に投げかけた問いは、『わたしの母上は、本当に女神なの？』だったかもしれない。

恐らくは、ふたつともに問うたのではなかろうか。

そして、ふたつともに違うと答えられたのだとしたら……もうそれ以上を尋ねることが恐ろしくて、なにも訊けなくなったのではないのか。

精霊に言っても仕方ないことだとは重々承知の上で、それでも……。

（嘘も方便って知らないのか）

と、言ってやりたいぐらいだ。

そのことを説明すると、フィオーンは苦虫を噛み潰したような顔になった。

街で売られている絵姿を見て、憧れている娘たちには見せられないしかめっ面だっ

た。

「なるほど……精霊たちか。迂闊だったな、そこまでは気が回らなかった……」

フィオーンは一旦黙りこんだ――またしても、沈黙が場を支配する。

もっとも、今度はそれほど長いことではなかった。

割と早く、フィオーンがアマンシールに問いかけてきたからだ。

「それで、君はなぜ、そのことが知りたいんだ？」

「お答えする前に、この件に関して、誓って殿下のほかに、この話題を持ち出したことがないことだけは断言させていただきます。わたしが知りたいと思ったのは、わたしの無知ゆえに、彼女の心を抉るようなことだけは避けたいがゆえ……もうひとつは、知っていることで、これ以上彼女に無用な痛みを与えずにすませることができるかも知れないと思ったからです」

事実そのものではなくとも、それに近いところを把握していない限りは、自分のどんな言動が、クランクレイアを傷つけてしまうかわからない。

それだけは、絶対にイヤだった。

はらはらと散る卯の花の木の下で、声を殺して泣いていた少女。
常の彼女を知らない者なら、一幅の絵とも評したかもしれない。確かに絵とも見まがうような、美しい場面だったかもしれない。
けれど、アマンシールはイヤだったのだ。
二度とあんな場面を我が目に映したくはないと思ったのだ。
もっとはっきり言うなら、絶対二度と、あんな風に泣かせやしない——そう思った。
そんな彼の決意は、はっきりとその眼差し、身を纏う空気に表れていた。
そうしたものを見抜いてか、フィオーンは、さらにもう一つ、問いを重ねてきた。
「そこまで見抜いておきながら、なぜ、あれに肩入れする？」
（ならば、彼女が正当な王女でも、女神の血を引く娘でもないことぐらいわかっていたように？）
問いかけの言葉は二重に聞こえた。
それでも……なぜだろう、答えるのに迷いはなかった。

「彼女の真っ直ぐさや純粋さを、損ないたくないと……なんだか、すとん、と思ってしまったんです。多分理屈じゃないんだと思います。彼女は一所懸命に、ただ頑張ってる。純粋に、その姿勢を守りたいと思ったというか……違うな。敵対する全部から、彼女を守りたいと思いました。できっこないし、変だとは思ったんですけど」

「いまならできるか？」

問いかける口調に含まれた、決意のほどを糾す響きに、アマンシールは大きくうなずいた。

「やります」

相手が皮肉げに笑った。

「自信たっぷりだな」

フィオーンはそこで考えこんだ。

13

寮に戻ると、ハーリクがなにか大荷物を開いていた。
彼の家である土産物屋で取り扱っている品のうち、王族の肖像画の写しに関してのみ、彼が学院内窓口を勤めていることを考えるだに、それが注文の品であろうことはたやすく想像がついた。
「相変わらず、盛況みたいだな」
声をかけると、赤茶の髪の少年は、振り返って人懐こい笑顔でうなずいた。
「当然、当然。なんたって、うちの契約してる工房は腕利き揃いだもんな。その分少ーしばかり値が張るけど、安物の似てないもの買うよりはってやつ、けっこういるし。先生たちなんか、額入り注文も珍しくないんだ。おかげでおれの小遣いは安泰

だ」

「まさか、値段に上乗せなんかしてるのか？」

驚いて尋ねたアマンシールに、ハーリクはぶんぶんとかぶりをふった。

「人聞きの悪いこと言うなよ。おれの営業のおかげで、客が増えたってことで、親父が小遣い増額してくれたんだよ。疚しいことなんかしてないよ、下手すりゃ、店の信用に関わるじゃないか。大体、量にもよるけど、週末ごとに荷物抱えて戻ってくるのは結構重労働なんだぞ？　ちょっとぐらい、小遣い増やしてもらったって、罰は当たらないだろう？」

悪びれることなくそう言い返してきた友人に、アマンシールはなるほどとうなずいた。

「確かにこれだけの荷物だと、大変そうだな」

「だろう？　ま、ここまで多いのは久しぶりだけどな。今回額入りの注文が多くて、運ぶのにも気を使わされたぜー……と、なに？　お前もなんか欲しくなったか？　さすがに学院内販売までは許可もらえてないから、この中から譲ってやるわけにはいか

ないけど、今度の週末まで待ってくれたら、持って来られるぞ」

一瞬、心惹かれるものがあったが、アマンシールはすぐに思い直し、かぶりをふった。

たとえハーリクにでも、決して悟られるわけにはいかないのだ。

「……いや、確か以前、王妹殿下の肖像の写しが大人気だとか、お前が言ってたのをふっと思い出しただけだから……」

絵姿を取り寄せたところで、なんの意味もない。

わかっているのに、つい言ってしまったのは、やはりフィオーン王子から聞いた話があるからだった。

「ああ、オルライジア殿下か。先生たちはもちろん、上級生にも大人気だぜ？　なんたって、夢の貴婦人だもんな」

「夢の貴婦人？」

鸚鵡返しにつぶやいてしまったのは、とてもハーリクが口にする言葉とは思えなかったからだ。

ハーリクはお世辞にも、詩的表現が得意とはいえないのだ――アマンシールもひとのことは言えないわけだが。

しかし、話の流れに違和感を覚えた様子もなく、ハーリクは「うん」とうなずいた。

「あと『蜉蝣の姫君』とも呼ばれてるらしい。薄命な印象が不吉なんで、表立っては誰も口にしてないそうだけどな。あ、ちょうど数学のシュローン先生に頼まれてた分がここにあるぜ？　見てみるか？」

一も二もなく、アマンシールはうなずいた。

「見たい」

「ほらよ。明日の朝一番に届けることになってるから、くれぐれも乱暴には扱うなよ？」

そう言って、ハーリクが手渡してくれたのは、繊細な額に納められた、両手を広げた大きさぐらいの細密画だった。

そこに描かれていたのは、王家には珍しい、淡い緩やかに波打つ金髪を、半ば垂ら

すような形に結い上げた、儚げな少女の姿だった。
瞳の色は、深い、澄んだ菫色――。
王家の……否、クランクレイアと同じ、菫色だった。

「もしかしたら、弟は……ケルティスは知らないのかもしれない」
そう、ディエーン国王太子フィオーンは語った。
「あれは母を無条件に慕っている……というか、母に言われるままに育てられたから、クランクレイアのことを、父の不義の子だと疎んじているきらいがないでもない」
だが、事実は違うのだ――と、フィオーンは告げた。
『ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスース。お前の先ほどの言葉を信じて、わたしは語ろう。ただし、聞いた以上は、わたしの期待を裏切ることは許さ

ん。それでも、知ることを望むか？』

王者となることを約束された者の、圧倒的な宣告だった。

その声に、その意思に、屈服したわけでは決してなかった。

それでもうなずいたのは、クランクレイアのためだった。

彼女のことをなにも知らないままでは、彼女を傷つける周囲から守りきることはできない——そう思ったからだった。

そうして、それだけの覚悟を決めて、聞かされたクランクレイアの出生の真実とは。

世に出回っている風評以上に厳しいものだったのだ。

蜉蝣の姫君と呼ばれた王女がいた。

おそらくは成人を迎えることはなかろうと、皆に目された、けれど尋常（じんじょう）ならざる美

しさをたたえた姫が。

あまりに弱いために、ディエーンの王家は彼女を政略の道具に使うことさえ諦めた。

彼女は、自由だった——成人するまで生き延びることはできまいと、博識者すべてが口をそろえたおかげで、彼女は自由な時を得た。

恋も。

そうして彼女は次代となる命を得た。

残る命を使い果たしても、たとえ命そのものをつぎ込んでも、生まれた命を産みたいと、彼女は主張した。

だが、当然のことながら、周囲はこれには反対した。

彼女の体が、とても出産には耐えられないものだったこともあったが、その胎内の子供の父親が誰なのか、いくら調べても判明しなかったからだ。

彼女もまた、子供の父親については決して口を割らなかった。

王家の女性の、未婚の……父をも知れぬ子供。

そんな存在を、王家が許せるはずがなかったのだ。

だが、命をかけての王女の訴えを、結局兄である国王は最後まで拒むことはできなかった。不憫な妹の願いを撥ね除けるには、彼はあまりにも彼女のことを愛していたのだ。

ただし、無事に生まれようとも、その子供の出生を明らかにすることだけは禁じた。それでもいいならという条件つきの許しに、オルライジア姫はうなずいたのだという……。

『そうして生まれたのが誰かは、言わなくともわかるだろうな。幸い叔母上は、出産を終えても命を落とされることはなかったが、ますますお体の調子を崩され、いまでは南の別荘で暮らしておられる。父上は、すべてを極秘裏に運ばれたはずだが、人の口に戸は立てられんということかな。女官や侍女の周囲を、詳しく調べさせることにしよう』

調べさせて、その後どうするつもりなのかは聞かなかった。

幼い王女を愛する者が、彼女を傷つける者たちに対し、取る態度はひとつきりだ。

アマンシール自身、それを止めるつもりはなかった。

（それにしても……）

と、思う。

単純な好奇心ゆえではなく、疑問に思うことが、ひとつあった。

（姫の、あの精霊たちと語らい、力を借りることさえできるあの能力……あれは、実の父親から受け継いだ資質じゃないのか……？）

ということだ。

聞いたところでは、現王家であるエルスースの家系で、強い不思議の力を行使する子供が生まれたという記録はなかったはずなのだ。

もちろん、当代柱神であるコーランジュの血を受け継いでいる以上、その手の資質を受けて誕生する子供がいないとは言い切れないだろうが、それにしても、クランクレイアのあの能力は飛びぬけている。否、飛びぬけすぎていると言っても過言ではない。

女神の産んだ娘などと、国王が言ったのも、またそれが——表向きとは言え——信

じられているのも、あの力あってのことだ。
（けれど、姫は生まれて間もなく、陛下にひきとられたはずだ……）
生まれてすぐに、そうした資質がはっきりと出るものだろうか？
（あるいは……）
父親はわからないと言いながら、王家では実のところ、オルライジア姫の相手が誰なのか、突き止めていたのではないのか。
そして、その子であれば『女神の産んだ娘』と称しても通用すると踏んだのではないか。だとしたら――もし、万が一だが、そういうことなのだとしたら、だ。
（クラン姫の実の父親は、すでに亡くなっているか、絶対に公表できない事情のある男ってことにならないか？）
気が滅入った。
（気づくんじゃなかった）
こんな面倒なことになんて。
思わず、ため息を洩らしたときのことだ、ハーリクが、「あ、そうだ」と言い出し、

端のぎざぎざした切断前の紙の束を目の前に突きつけてきた。

「……なに？」

尋ねたアマンシールに、「まずは見てくれ」と友人は言う。

言われた通り、素直に目を通した後、彼は再び問うた。

「だから、これ、なに？」

紙は全部で七枚あった。

それぞれ虹の七色を背景にした、美男美女の姿が、一枚ひとりの割合で描かれている。

虹の七色――七枚――そして、四人の美女と三人の美男子。

まさか、と思った。

「うちの店の新商品候補。銅版画なんだけど、出来としてはどう思う？　木版画より細部に手を入れられる分、細密画に近い出来になってると思うんだけど？　なにより、これなら手描きよりずっと大量に作れるしなー」

ハーリクの天分は商売にある、とこのときアマンシールは確信した。

「……出来は、悪くないとは思うけど……虹神神殿ですら差し控えてる虹神さまの絵姿を売り物にするのは不味いと思うよ。大体、絵にも描けぬ美しさって描写されてる神様を、そもそも描こうだなんて瀆神行為だって謗られかねないって！」

心底から、これはまずいと思っての忠告に、ハーリクは緊張感に欠ける笑顔で、

「あー、やっぱり？」と、さして残念そうでもなく答えてきた。

「おれもやっぱり、虹神さまはまずいだろうとは思ったんだけどなー。その絵、描いてきたひとが、まるで虹神さまたちのこと見てきたみたいに話す上に、原画がまた、すごく説得力あったもんだからなー。いや、線とかは荒いんだけど、妙に的確に特徴摑んでる、みたいな……実物知らないのに、変な話だけど……」

それは、変を通り越して妙、あるいは怪しいというやつだ。

「……ハーリク。お前、さっき、店の信用を落とすような真似はしないとか言ってなかったか？　怪しいやつを懐に入れるような真似するんじゃないよ」

「いや、言われたらその通りなんだけどな……んー、なんて説明したらわかりやすいかな？　あ、そうだ、虹神さまの絵姿なんて、最初から売り物になんてできるとは、

うちの親父も思ってないよ？　単に銅版画ってのが、どれだけの能力を持ってるかってのを証明するため……とか、あのひとは言ってたな。ただ、出来のいい、大量生産のかなう商品ができたら、単価を下げられる分、客層広げられるかもってのが、どうも親父の本音みたい」

「つまり、提案してきた人間がいるんだな？」

「うん、そう。なんかな、見た目は軽くて……違うな、そうだ飄々（ひょうひょう）としてるってやつ？　なのに話してると、不思議に引き込まれるっていうか、なんか、一緒に大きなことに挑みたくなるっていうか……不思議にそんな気にさせられるって、親父が言ってたんだわ。親父も人よくて、前に何度か騙（だま）されて、痛い思い味わわされてるの知ってるからな、おれぐらいはしっかりしなくちゃって思って、うまく親父ごまかして、そのひと紹介してもらったんだけど……」

その結果がどうなったのかは……聞くまでもなかった。

最初不審に思っていたはずの相手なのに、ハーリクときたら、「そのひと」と呼ぶのだ。

気を置く関係ではなくなって久しいはずの自分との会話で「そのひと」と。
相手に好意を抱いていることは間違いない。
なんだかちょっと、面白くなかった。
考えるべきことが山ほどあって、相談したいのに、相談できないジレンマを、自分は抱えこんでいるのに、ハーリクは生来の人懐こさで、いつの間にか、自分以外の誰かを懐に入れてしまっているのだ。
わかっては、いる。
それはハーリクの非ではない。
けれど、唐突に感じてしまったこの寂しさは何なのだろう？
クランを守りたいという思いと、そのためだったらなんだってできると思ったことに偽りはないというのに……なぜ、こんな風に感じてしまうのだろう？
わからないことが多すぎるということに、アマンシールはこのとき初めて気づいたのかもしれない。
世界は謎に満ちている。

14

クランクレイアはきょとんとして、目の前に置かれたものと、持って来たアマンシールの顔を交互に見比べた。

「これは……なんだ？」

茶器を置いても充分な広さの残るテーブルの上には、格子（こうし）状の線の描かれた板と、白と黒の石がある。

陣取りゲームのそれに似ているが、石には字や記号が彫ってあるわけでもなく、彼女の知っているそれとは明らかに違っていた。

「東方の陣取りゲームです。ハーリクの……あ、わたしの寮で一緒の部屋にいる友人なんですが、そいつの伯父（おじ）さんが東方の事情に詳しいらしくて、都合してもらいまし

た」

ハーリク――と聞いて、少しむっとした。

いちいち説明されずとも、クランクレイアはその少年の名前なら知っていた。ガジェス＝アマンシールと話していると、けっこう高い頻度で出てくる名前だからだ。

しかも……自覚はないのかもしれないが、割と色々な説明までしてくれている。

おかげでクランクレイアは、会ったこともないというのに、ハーリクという少年が赤茶色の髪をしていることも、そばかすのある愛嬌のある顔をしていることも、よく軽口を叩くくせに、妙なところで目端が利くことも知っている。

なにより、その友人のことを話すとき、ガジェス＝アマンシールが、とても楽しそうな顔になることを。そして、その少年のことを語るとき、ガジェスはいつもと違う言葉遣いになることも。

彼のことを話題にしたとき、ガジェスの口調は貴族らしい言葉選びを忘れることが多いのだ。常のガジェスなら『そいつ』なんて言葉は使わない。

だのに――。

（なぜ、そのハーリクとやらに関するときだけ……わたしには一度だって、丁寧な物言いを崩したこともないくせに……）

言うなれば、それは一種の焼きもちだったのだが、侍女や長兄以外で、初めて親しくできる相手を得たばかりのクランクレイアには、わからない。

また、厳しく感情を律することを周囲から求められて来、またそれに応えてきたものだから、なおさらというものだった。

「殿下？」

戸惑ったような、ガジェスの声がなんだか腹立たしかった。

友人だと言う少年のことは呼び捨てにするくせに……しかも、そいつ呼ばわりするくせに、自分のことは姫君とか殿下としか呼ばない……無性にイライラした。

とはいえ、王女たるもの、感情に振り回されてはならないことぐらいは承知している。だから、不機嫌さを隠して、話題を切り替えた。

「それで……どういうルールなんだ？　わからなければ、遊びようがないだろう？」

こちらの苛立ちに気づいた様子もなく、ガジェスは「これから説明しますよ」と、

にこやかに答えて盤上に白と黒の石を置きだした。
どうやらあからさまに感情を外に出してはいなかったらしいことにほっとする一方、気づかれなかったことが気に障った。
矛盾（むじゅん）していると、自分でも思ったけれど、どうしようもなかった。
もっとも、そのことは、ガジェスの説明を聞いている内に忘れかけてしまった。
白側と黒側とで、陣地の取り合いをするゲームのルールは、単純に見えるけれど、その分奥が深かった。
簡単なルール説明の後、「やってみませんか」と誘われ、うなずいたら……夢中になった。
「ここに置く」
黒い石で、盤の四隅（よすみ）を取りにいく。
「そうですか。それでは、これではどうですか？」
ガジェスは案外意地が悪い。
クランクレイアが置いた石のさらに内側に白い石を置いてきた。

やられるものかと、そのまた内側に黒石を置いたら、そのすぐそばに打ってきて、気がつけば、逃げ場が奪われてしまっていた。

「うー」

と、思わず声をあげた時のこと。

背後から、

「おや、珍しいものがあるじゃないか」

という、聞きなれた声が降ってきた。

大好きな兄の声だったが、クランクレイアにはその登場を喜ぶだけの余裕がなかった。

どうやったら、陣地を守れるのか——そのことだけに集中していたから、兄の出現さえ邪魔に思えた。

そんな風に思ったことなど、これまで一度としてなかったというのに、だ。

すぐさまそのことに気づき、彼女は意識を切り替えた。

大ディエーンの次代の王に、敬意に欠ける態度を取るなど、決して許されることで

はない。
だから、感じた苛立ちごと、全部消して笑顔で兄を仰ぎ見た。
「兄上」
笑顔で。
会えたのは、本当に嬉しかったので、演じる必要などなかった。
やさしい、やさしい兄――即座に彼は、クランクレイアの不利を見て取り、忠告してくれた。
「こっちはもう無理っぽいね。でもこちらの陣地は手付かずだから、今のうちに固めてしまおう」
兄の指摘通りに黒石を置くと、ガジェスが渋面になった。
優しげな、大人の顔をしていた彼の、そんな顔を目にすることができて、少しだけすかっとしたが、結局はそれだけだった。
その顔を引き出したのは自分ではなかった。
兄だ。フィオーンなのだ。

そのことが無性に腹立たしい。

しかも、兄が味方についた途端、形勢はクランクレイアの有利に傾いた。

自分の力ではない。あくまで兄の……フィオーンの力だ。

我慢できない、と思った。

「もう、いい！」

気づけば、クランクレイアは叫んでいた。

「どこの陣取り合戦でもいいい！　どうせわたしは力不足の役者不足だ！　ジェスなど……ジェスなんか、ずっと兄上とかハーリクとかと遊んで戦っておればいいんだ！　わたしはやめる！　やめるぞ！　ジェスの馬鹿！」

そう言い捨てて、席を立った。

自分でも、なぜこんなにイライラするのかわからないまま、彼女は庭に向かって走りだした。

いったいなにが起こったというのか。
アマンシールは呆然と、遠ざかっていく小さな背中を見つめた。
確かに少し前までは、自分のもってきたゲームに興じ、楽しそうだったのに……フィオーン王子が現れたときも、嬉しそうにしていたのに……なのに、突然。
（なんなんだ？）
わけがわからず、首をかしげた彼の耳に、フィオーンの抑えた笑い声が飛び込んできた。
「殿下？」
「どうやら機嫌を損ねちゃったみたいだね」
どこか楽しそうでさえある口調に、アマンシールはますます困惑した。
「そうみたいです……けど、なぜ……」
春の出来事以来、ふたりとの距離は近くなったと思っていた。
けれど、こんなことは初めてで、結局自分の勝手な思いこみだったのではないかと

感じてしまう。

「わからないかい？」

可笑しそうに、フィオーンが笑う。

とても楽しげで、嬉しそうな顔だった。

「あの子は、お前をわたしに盗られたと感じたんだよ」

フィオーンが自分を呼ぶとき、君でなくお前と言うようになったのも、あの話の後だった。

そのことは、彼らとの距離が縮まったことの証だと思え、アマンシールは喜んでいたのだが……そう単純なことではなかったのだろうか？

「盗られる……？　それなら、わたしに殿下を……と思われたのではありませんか？」

なにしろ、ライラーナから聞いた話では、クランクレイアが物心ついて以来、フィオーンが彼女を可愛がることこの上なく、また彼女も彼を心から慕っていたということなのだから。

それなら、得心が行くのだ。

しかし、これまでだって、何度も週末の茶会にフィオーンが参加することはあったのに、今日のようにクランクレイアが機嫌を損ねるそぶりを見せたことはなかったのも確かだ。

相手が小さな女の子だから、なのか、それとも自分が両親や兄たちが言うように風変わりにできているせいなのか——教えてくれようとしている王太子の言葉さえ、理解できないというのは、やはり自分に問題があるのだろうか……などなどと、アマンシールは悩んだ。

「ジェス。お前、複雑に考えすぎてやいないかい？　あの子のあれは、独占欲の発露というものだよ。せっかく出来た大事な存在を、ほかの誰にも取られたくないというね。あの子は聡すぎるぐらいに聡い子だから、わたしには全力で甘えかかることはなかった。してはならないことだと、自制していたのかもしれないね」

それは、あり得ることだとアマンシールも思った。

聡い彼女は、きっと幼いころから、自らの置かれた立場というものを肌で感じてい

たに違いなく、そうであればあるだけ、王太子であるフィオーンに無条件に甘えることは出来なかったろう。

だが、あの卯の花が散るなかで、覚えず自分は彼女の内側に入りこんだ。

彼女自身、告げたのではなかったか――「ジェスは……まるで、三人目の兄上みたいだ」と。けれど、フィオーンの言うとおり、彼には全身で甘えることができず、また第二王子であるケルティスが彼女に対する誤解を抱いたまま、親しくしようとしないのであれば……自分こそが、彼女が初めて得た、『甘えてもいい存在』なのではないか。

初めての経験ゆえに、感情がうまく制御できないのだとしたら……腑に落ちることはいくらでも見つかった。

「あ」

我ながら、間抜けな声をあげたものだと思った。

そこに、余裕たっぷりのフィオーンの声が重なった。

「気がついたかい？」

にっこり笑うフィオーンは、二歳の歳の差があることを差し引いても優越感たっぷりなものに思え、アマンシールは面白くなかった。
「わかったとは思いますけど……難題です」
渋面で答え、アマンシールは腰を上げた。
「失礼しても？」
「早く追いかけてやらないと、ますます旋毛を曲げるぞ？」
「はい、では失礼します」
言って、アマンシールも駆け出した。
伊達に半年以上つきあってはいないのだ。
クランクレイアが臍を曲げた際の行動範囲はわかっている。
早く捜し出さなければ――そうして、嫌がられてもなにがそんなに気に障ったのかを聞き出さなければいけない。
自分に非があれば、改めなければならないし、譲れないものを感じたら、わかってもらえるまで説明しなければいけない。

正直、誰かを納得させるだけの言語力が、自分にあるかどうかは自信がない。
それでも、やるしかないんだろうな、と思ったとき、しみじみとフィオーンは意地が悪いと思った。

「全く、もう……」
ひとりテーブルについたまま、ディエーン王国王太子たる少年は声をあげた。
「なんだって、こんなに手がかかるんだろう……可愛い、可愛いクランがわたしから離れていくのを、黙ってみているだけでも業腹なのに、それを手助けしてやるだなんて、なんだか私はとんでもない道化を演じているような気がするよ……ライラーナ、お茶のお代わりもらえるかい？」
くすくすと、ライラーナが笑う。
「いいお兄様ぶりだと思いましたけれど？」

「仕方ないじゃないか。クランが気に入らなきゃ、たとえファラスースの息子だって弾き飛ばしてやったさ。でも、さすが親父っていうか、陛下っていうか、人選が的を射てるのだもの。ただの天然でも、ただの暢気者でもないんだ……。素のクランをあっさり受け入れた上、あの子に甘える気にさせるなんて、逸材であることは認めるしかないもの。あー、畜生」

「王太子殿下の使われる言葉ではありませんよ？」

「可愛い妹が、他人に掻っ攫われるんだぞ？　乳兄弟のよしみで見逃してくれよ」

ライラーナは大きく息をついただけで、フィオーンの言葉には答えなかった。

クランクレイアの隠れる場所は、大体三つに絞られる。

特に追いかけて来て欲しいときのそれはふたつきりなので、見つけるのはさほど難しくはなかった。

案の定、コーランジュの屋敷につながる道の途中、風霊たちが集うと聞かされた楠の大木の洞のなかに、小さな体を丸めて座りこんでいるのが見えた。

精霊たちの言葉を耳にする少女に、アマンシールが近づいてくるのがわからないはずがない……それでもじっとして動かないのだから、やはり待たれていたということだろう。

「先ほどは、驚かされましたよ。わたしは、なにか失礼なことをしましたか？」

尋ねるアマンシールに、クランクレイアは返事をしなかった。

振り向きさえしない。

（もしかして、相当お冠なのかな？）

妹のように思っている――とは言ったものの、実際に妹がいるわけではないから、いまひとつ対応に自信が持てない。

「……殿下？」

少々声が細くなってしまった。

嫌われているわけではないとわかるのだが、クランクレイアの反応はいつも思いが

けないものばかりだから、反応に困るのだ。
「……じゃない」
ようやく声が聞こえたが、小さすぎて前半部が聞き取れなかった。
「は？」
問い返すと、すごい勢いで彼女が振り返った。
睨み付けてくる紫の瞳の大きさに、なぜか気おされた。
「わたしの名前は殿下でも姫君でもないぞ！」
怒りゆえか、苛立ちゆえか、それとも別の感情ゆえか、紫水晶の瞳が、きらきらと輝いていた。
「わたしにはちゃんと、クランクレイアという名前がある！」
もちろん、そんなことは知っている。
だが、彼女がなにを言いたいのかがわからなかった。
だから、思わず――「はあ、存じてます」という、ずいぶん間抜けな返事をしてしまった。

これがまたまずかったらしく、クランクレイアは癇癪を破裂させてしまった。
「わかっておるのなら、なぜ名を呼ばんのだ!? 学院の友人とやらのことは気安く呼び捨てにするくせに……一の兄上のことだって、ふたりきりのときは名を呼んで話しているくせに！」
（どこでそんなこと、耳にしたんだ）
と、思った瞬間、彼女が精霊に殊に愛されている存在であることを思い出した。
確かに、風の精霊に対して、秘密を持つことは不可能に近い。
それはわかったが、彼女の要求には応えられるものではなかった。
内情を知ったとはいえ、彼女が高貴の身分であることに違いはないのだ。特に異性間では、相手の名を呼ぶことには深い意味がある。彼女は王女という立場にあるから、臣下の家の出である自分を名前で呼ぼうが相性で呼ぼうが大丈夫だが、逆の立場にある自分にそれを求められては……かなり、けっこう、本気で困る。
「ですが、姫……」
「だから、わたしの名は姫でも姫君でも殿下でもないと言っておる！」

（無茶を言うな――――！）

と思ったけれど……なぜだか彼は、クランクレイアの紫の瞳に弱かった。

あの大きな瞳に、しかも涙まじりで見つめられたりしてしまうと、無条件で降参したくなってしまうのだ。

「……公式な場や、事情に詳しい方々以外がいらっしゃるところでは、絶対できませんよ？」

搾り出すようにして洩らした言葉に、目の毒としか言いようのないような笑顔でクランクレイアはうなずいた。

「もちろん！」

どこが、もちろんなのか、とアマンシールは問い返したかった。

あんな……反則としか思えない笑顔をたたえておきながら、なにを『もちろん』わかっているというのか。

（前途多難だ……）

と、思った。

規格外の姫君とつきあうには、規格外の苦労が洩れなくついて来るものらしい。

けれど、

「帰りましょう……フィオーン殿下もきっとお待ちになってますよ」

そう告げたとき、本当に嬉しそうにうなずいたクランクレイアの姿を目にした瞬間、ほかのことなどどうでもよくなってしまった。

「さあ、クランさま」

少女は嬉しそうに、思い切り首を縦に振った。

15

春が去り、夏が訪れ、秋が密やかに忍び寄り――。

そんな季節のなかを、アマンシールはハーリクやクランクレイア、フィオーンたちと過ごした。

彼らと触れ合うことで、彼は自身が目を向けようとしなかった場所に、未知の世界が広がっていることを知った。

ときに関心を覚えたことには分け入り、調べたことが、確実に己(おの)が糧(かて)となっていることに気づかされるのは、案外気持ちのいいことだった。

もっとも、興味を抱けないことに関しては、相変わらず指一本動かそうとしない不精ぶりは健在だったが。

殊に異性に対する関心の薄さでは、ハーリクを大いに嘆かせた。

「お前、おかしいよ。絶対どこかずれてるって！　可愛い女の子を見て、いいな、とか、親しくなりたいな、とかつきあいたいな、とか考えたことないのか？」

大まじめに問いただされ、アマンシールは困惑してしまった。

「可愛い子なんか見たら、普通に可愛いと思うよ？　笑顔の綺麗な子だったりしたら、いつも笑ってたらいいのに……とかは思うけど」

それ以上の思いが湧いてくるかと問われたら、否としか答えようがなかった。

この答えに対する親友の反応は「お前、馬鹿？」だった。

「笑顔を見たい、見ていたいって思ったら、どうしたら笑ってくれるか考えるもんだろうが。逆に、泣いてたり、淋しそうな顔をしてるのを見たら、どうやって慰めようって……一度もそういうこと考えたことがないのか？」

「それは……」

なくもないことを思い出し、アマンシールは言葉に詰まった。

そう、あれは王立学院第一学年の、後期に入って間もなくのころ——卯の花の下に

うずくまり、声を殺して泣いていた少女の姿を認めたときだ。

なぜ、彼女がそんな風にして泣かなければならないのかと、心底から怒りを覚えた。同時に、どうしたら彼女に笑顔を取り戻してもらえるのか、真剣に悩んだ。

結局彼が選んだ話題といえば、自らが苛められた際、用いた仕返しの方法で——いま思えば、とても真っ当とは呼べない代物だった。

それでも、クランクレイアが笑ってくれたから……なんとなく、あれで良かったのだと思っていたように思う。

次にまた、同じようなことなどあっては困る——と思いつつ、それでも彼女の笑顔を見ていると、胸の奥が温かくなる事実に目を瞑るわけにもいかず、彼はそっと親友に問いかけた。

「女の子って、なにをしたら喜んでくれるのかな？」

「ほーう」

奇妙な声を、友人が上げた。

「なるほど、おれが心配してたほどの朴念仁じゃなかったわけか。これは安心、安

心。女の子が喜ぶものだったら、いくつかあるけど……まず、甘くて美味しい菓子は、例外なく喜ばれるんじゃないか？」

それはそうだと思ったが、彼女の周囲から、甘い香りが絶えたことがなかったことを思い出し、かぶりをふった。

「いつも作ってもらってるらしいから……」

「うーん、いいとこのお嬢さんか。ま、お前の実家のこと考えたら、当たり前っていえば当たり前か。ほかに普通だったら花なんかをお勧めしたいとこなんだが、よっぽど珍しい花でもない限り、喜んでくれそうにないな」

（そうかな？）

首をかしげ、思い出してみる。

……どうも、そういうわけではなさそうな記憶が甦った。

「菫……とかでも喜んでたと思う」

夏の長期休暇で、故郷のダランジェイドに戻ったとき、以前見つけて庭に移植していた菫の変種の種を、持ち帰ってクランクレイアに渡したら、それはそれは喜んでく

れた。

彼女は、育てることが好きなのだ。

しかし、聞いていたハーリクは別のことを連想したらしい。

「あー、なるほど。深窓の令嬢にしたら、豪華な花ばっかり見慣れてるもんだから、小さな菫の花束が新鮮に感じたわけだな」

そこで黙っていればよかったものを、つい訂正してしまったのは、ハーリクの脳裏にどんな女性像が出来上がっていくのかを恐ろしく思ったのと、結果的に騙したり誤魔化したりしたのだと、後に思われたくない、という不安からだった。

「違う、ハーリク。渡したのは花束じゃない。種だ」

聞いたハーリクは、自分の耳が信じられないと言いたげな顔になった。

「種ぇ!?　そんなものもらって、どこのご令嬢が喜ぶんだ!?」

普通、嬉しくないものなのか――ひとつ学習したと思いつつ、アマンシールは正直に、そのときのクランクレイアの言葉を繰り返した。

「種や球根から育てるのは楽しい……と言っていたよ。実際、上手に育てて、綺麗な

花を咲かせてたし。水をやりすぎて根腐れを起こすようなこともなくなったな」

ここで、ハーリクが沈黙した。

「……お前、その状況をずっと、見てきたってわけか？」

ずっと、とは言えないだろう――せいぜい週に一度、午後だけ会っていたわけだから。

「そういうわけではないと思うけど……どうかな？」

首をかしげたアマンシールの襟を、ハーリクが力一杯摑んで引き寄せた。

「お前……お前な。わかってるだろうな？　殿下はまだ十前なんだぞ!?」

相手の言葉の意味を、理解できずに思考を進めるのは、アマンシールにしても同じことだった。

「そうなんだ。妹もいないから、本当にどうしていいのかわからないんだ。笑ってくれてるときはいいんだけど、一旦機嫌を損ねてしまうと……もう。前にも、突然癇癪を起こされて……本当に、どうしようかと思って途方に暮れた。だから、次はうまく機嫌を直してもらえるように、なにかないかと思ってたときに、ハーリクが丁度いい

タイミングで、話を切り出してくれたものだから……」

どれほど資質があろうとも、天然は天然である。

ハーリクがぐっくりと肩を落とした。

このときのハーリクの心境といえば、（妹なんて、そんなに無条件に愛しくも可愛くも思える代物じゃないってのに、知らないってことは、ある意味偉大で恐ろしいな）だった。

どこかで、クランクレイアとアマンシールの距離が縮まることを、恐れていたのかもしれない。

だから、こう投げ捨てた。

「妹分の機嫌に振り回されてる間は、ガキだって証拠だな」

アマンシールが食いついてくる。

「なんだよ、言えってお前が言ったから、言ったんじゃないか。なのに途中で放り出すのか？」

挑発するような言葉を口にしても、ハーリクは乗っては来なかった。

その意味を、アマンシールは自分なりに考えてみた。
言うだけのことは言ってしまったという意味なのか、これ以上は誰かが伝えることではないということなのか。
ハーリクは、いつもお節介なまでに親切なくせに、思いがけない一瞬に、ひらりと身をかわすようなところがある。
「妹分だってなんだって、泣かれたら……」
違う。
本当に困惑してしまうのは、どう対応していいものか、わからなくなることだ。
失敗して、笑顔に戻ってくれないときに感じる、どうしようもない立ち尽くす感覚だ。
クランクレイアが淋しそうな顔をするとき、泣いているとき。
現実に胸が痛むのだ。
これを、どう表現したらいいというのだ。
どう、心の中で片づけたらいいというのか。

その痛みを取り除くことしか考えられない。
そう思った。
そう感じた。
それでずっと、大丈夫だった。
だから、ずっと、このまま大丈夫なのだと思った。
再び、あの少女の、声を殺して泣く姿を目にするまでは。
それは、秋の終わり——出会って三度目の冬の扉が開くころのことだった——。

クランクレイアの脱走癖がでたのは、実に久しぶりのことだった。
困惑するライラーナに「捜してきます」と言い置いて、王宮の庭に足を踏み入れたものの、アマンシールも戸惑っていた。
先週の茶会で、手軽にできる手漉き紙の道具を持参すると約束したとき、彼女は紫

の瞳をきらきら輝かせながら「待ってる」と言ったのだ。

自分で作った押し花を挟んだ手漉き紙で、便箋や栞を作るのだと、それが楽しみでならないと言っていたはずの彼女が、どうして今日、姿を隠してしまったのか。

（以前と違って、陰口たたく女官とかはいないはずだけど……？）

首をかしげながら、一番見つかりやすい隠れ場所に向かった。

空振り。

二番目の場所でも、見つけることはできなかった。

三番目か、当代さまの屋敷か——と迷い、三番目の場所を先に捜すことにした。クランクレイアは本当に人目に触れたくないときは、そこへ向かうことを知っていた。

はたして——。

そこに彼女はいた。

二年半前とは違い、うずくまってはいなかったが、声もなく涙を流しているのは同じだった。

（本当に、なんでこんなに唐突なんだか）

これから泣くと予告して泣きだす者はまずいないだろうが、前兆ぐらい示してほしい、とアマンシールは無茶なことを思った。

（でなきゃ……甘い菓子も綺麗な花も、好きそうな絵草子も用意できないじゃないか）

我が身ひとつで、泣く少女を慰め、泣き止ませるのは苦手なのだ。

なのに、こんな状況では小道具の用意のしようもない。

いっそ、見なかったふりさえしたかったが、そうもいかない。彼女の周囲に集まっているに違いない精霊たちは、すでに自分のことを告げているに決まっているのだし……なにより、クランクレイアが、声も上げずに泣いている姿を目にして、黙って立ち去れるはずがない。

ほかの誰かだったら――という仮定は、彼の脳裏には浮かばない。

母は泣き顔など、間違っても他者に見せることはなかったし、遠縁の貴族令嬢と呼ばれる人種は、その場を目撃されたことに怒りと屈辱を覚える種の者たちばかりだった。

一度、まだ五つぐらいのころだったろうか、いつものように自宅の庭をうろついているとき、偶然、遊びにきていた年上の遠縁の公爵家の少女が泣いているのを見かけた。

なにぶん子供だったこともあり、しかもその少女が泣く姿など初めて目にしたものだから……近づいて、最悪な言葉を告げてしまった。

『あー、泣いてる』

……あれは、本当にまずかったといまならわかる。

アマンシールの次兄にからかわれ、庭で泣いていた少女は、真っ赤な目で、きっ、と彼を睨み返すなり、そばに繁っていた木の枝を折り、彼に歩み寄り、その枝で思い切り彼の横っ面を張ってくれた。

『あなたたちときたら！　兄も意地悪なら、弟も最低だわ！　大嫌い！』

そう叫んだ少女は、現在二人目の兄の許嫁だが、それ以来嫌われたきりだ。

本当に、苦手なのだ……こんなことは。

けれど放ってもおけない……ほかの誰でもなく、クランクレイアのことであれば。

（いやだな）
とか
（面倒かも）
とか――。
確かに、近づくまでは思った。
けれど、クランクレイアの、声なく泣きつづける体のそばに立ったとき、そんなものは吹き飛んだ。
「……なにが、ありました？」
尋ねた彼に、クランクレイアはすぐには答えなかった。
けれど、「別になにも」と強がることもしなかった。
そばに佇んで、ただそばにいて――。
どれだけの時間が経ったのだろう。
思いの丈を吐き出すように息を洩らし、クランクレイアが告白した。
「……ジェス」

ジェス——それは、いつのまにか、クランクレイアとフィオーンだけが使うようになった、自分に対する愛称だった。

「三日前、叔母上……王妹殿下が儚くなられたのだ……」

王妹殿下——オルレイジア。

現国王エスライドの妹姫にして、生粋の王族。その体の弱ささえなければ、どんな王家への輿入れさえ思うがままであったと言われている、貴婦人のなかの貴婦人。

そして、決して公にされることのない……クランクレイアの実母。

アマンシールはなんと答えていいのかわからなかった。

そんな彼の当惑や戸惑いに頓着せず、クランクレイアは自ら彼に近づき、細い腕で彼を抱きしめてきた。

「叔母上が、真実わたしにとってなんであったのかはわからないし……わからないままでもいいと思う……」

でも、と彼女は続けた。

「でも、一昨日、眠っているときに、気のせいかもしれないけど、ふわりと優しくて

温かい気配に包まれたような気がした。……名前を、呼ばれたような、気がした。これって、どういうことなんだろう!?　だって、わたしは叔母上のことなんて、なんにも知らないのに……会ったことさえないと言うのに！」

わたしはやっぱり、叔母上の不義の子なのでは――。

続けようとする少女の体を、ことさらきつく抱きしめた。

その先の言葉を言わせないために。

「あなたは、あなたですよ」

答えにならない言葉を、アマンシールはもう一度繰り返した。

「誰がなんであれ、あなたがあなたであることに変わりはありません」

それに、と続けて彼はクランクレイアの瞳を覗き込んだ。

「そのときに感じたことは、イヤなものでしたか？　そうでなかったのなら、そのことだけを覚えておけばいいのですよ。殿下はきっと、最後に挨拶にいらっしゃったのでしょうし……」

たとえ、物心ついて以来、会ったことがなかったのだとしても――。

「クランさまが、殿下の可愛い血族でらっしゃることは間違いないことなのですから」

その言葉に、クランクレイアの強張っていた体から力が脱けた。

「……そう、か……」

まるで自身に言い聞かせるかのように、少女は一度うなずいた。

そして、今度は噛みしめるように、つぶやいた。

「そうだな」

胸のなかには嵐が吹き荒れているであろうに、彼女は乱れはしなかった。

一瞬だけ、自分の知る真実を打ち明けてしまおうか、とアマンシールは思った。

けれどクランクレイアはまだ九歳なのだ。

すべてを知るのは、もう少し先でもいいはずだと、彼は自分に言い聞かせた——。

16

それは、王妹オルレイジアが病没して半年ほどが経とうとしていたころのこと。
アマンシールは休日にロスタロイドにあるファラスース侯爵邸に呼び出され、父であるリュシアンドから意外極まることを言い渡された。
「は？」
決して頭の回転が鈍くはない――興味のある内容か否かで、回転数にあからさまな格差が生じるとはいえ、だ――彼が、すぐには父の言葉を理解できなかったのには理由があった。
「秋の豊穣祭、ですか？」
その、式典の後、王宮で催される宴に出席しろ、とリュシアンドは告げたのだ。

豊穣祭は、ディエーンでもかなり大きな行事に数えられている。そこに、いくら国の重鎮の子息だからと言って、成人前のアマンシールが出席するというのは、どうにもおかしな話だった。

王族を除けば、貴族の子供の社交界へのデビューは大抵十五、六だ。

令嬢の場合、もう少し早く十三、四といったところだが、大抵はまずもっと小規模の行事や宴においてデビューを果たし、それから公式の場に出席が許される。

アマンシールは十四。

名門ファラスースの子息であれば、例外的に成人を認められてもおかしくはないが、それにしたところで、事前にデビューしていればの話だ。

国をあげての祝祭でデビューできるのは、王族と、それに連なる公爵家の子女だけだ。

そして、現在、アマンシールは社交界にデビューしてはいない。

どうにもおかしな話だった。

「それは……掟破りな無茶な話でしょう」

王国の安寧と安定を願う――というよりは、静かな日常を崩されたくないとの思いで、反論した彼に、リュシアンドは「うむ」とうなずいた。

どうやら、父である侯爵自身、この横紙破りな行為には、得心がいってないらしい――と、そのことに気づいた瞬間、アマンシールはものすごーくイヤな予感に襲われた。

納得のいかない決定を、それでも父が息子に押しつけるとしたら……それは、父以上に力のある誰かが裏にいるとしか、そして父にそのことを求めているとしか、考えられないではないか。

はたして、リュシアンドは、渋面で打ち明けてきた。

「陛下と王太子殿下、おふたりからの直々のお申し出だ。急すぎると一度はご辞退したが、どうしてもと仰られるのでな」

「そうですか」

国王はともかく、王太子フィオーンとは、かなり親しくつきあってきたと思っていただけに、腑に落ちないものを感じたのは確かだ。

けれど――。

（こんなやり方は好きじゃない）

という思いのほうが強かった。

「じゃあ、父のきつい言いつけにも従わない不肖の息子だとでも片づけてください。実際、寮のなかで起こる面倒を片づけるだけでも四苦八苦してるんです。寮の監督生になんか選ばれたものだから、本当に悪戦苦闘の毎日というか、まだまだ学院に馴染めないでいる新入生の面倒みてるだけで、いっぱいいっぱいなんです。当日は、父上に厳命されていたにもかかわらず、寮内でなにか騒ぎが起こったとかなんとか、そういうことにして……」

「馬鹿者！」

と、一喝される。

「どうせ、そう言うに違いないだろうとわかっているのに、それですむならわざわざお前を呼び出すはずがないだろうが！」

言われてしまえば、確かに納得するしかなかった。

「はあ」
（では、なぜ？）
灰色の双眸で、声なく問いかけたアマンシールを前にし、リュシアンドは苦々しげなため息をついた後、吐き出すようにこう告げてきたのだ。
「秋の豊穣祭、クランクレイア様が初めて、公に姿をお現しになるという話だ」
王族の、姿現しは早い。
平均すれば、四、五歳だという。
王太子であるフィオーンも、第二王子であるケルティスも、似たような年頃で民の前に姿を現している。
クランクレイアだけが例外だった。
その理由は、友人のハーリクが教えてくれた。
『あくまで噂らしいけどな。どうやら、姫君は一度攫われそうになったらしい』
彼女は、豊穣祭のころ、ようやく十にはなるはずだか……それでも、たったの十歳だ。

（いったい、陛下も王太子殿下も、なにを考えてらっしゃるんだ!?）

確かに、彼女は普通の姫君とは違う育てられ方をしている。

それは、認める。

彼女の指先は、固くなっているし、その指の付け根には、何度も肉刺をつくることでしかできない、固い皮膚がある。

小刀等の扱いに長けているのも、あまり姫君らしくはない。

恐らく、狙われている事実のもとに、彼女には護身術が仕込まれている――王の采配で。

それでも、彼女がまだ、十に満たない子供であることに違いはないのだ。

（なのに、なぜ……？）

王はこんな決定を下し、王太子はそれを看過したのか。

本当に、なぜ……？

答えは、自分が一歩踏み出さなければ、届かない場所に置いてあると確信した。

（安全圏にいるな）

と、誰かにせせら笑われているような気がした。
踏み出せ、と言われているのか。だが、その理由がわからない。
「父上は……」
気が付けば、アマンシールはリュシアンドに問いかけていた。
「いまのこの状況で、姫君が公の場に姿現しをしても大丈夫だと思ってらっしゃいますか？」
リュシアンドはすぐには答えなかった。
「それは、お前自身、不安に思っているということか？」
尋ねられ、うなずいた瞬間「僭越だぞ」と言い切られた。
「お前のような子供が、王家の決定に疑問をさしはさむなど、僭越以外の何物でもない」
父には珍しい、上から押しつけるような物言いだった。
だからこそ、だったのかもしれない。アマンシールはむきになって反論した。
「なぜです!?」

胸の奥に生じた嵐に突き動かされるまま、彼は叫んだ。

「姫君は、わたしにとってもかけがえない御方です。その方のことを心配するのが、どうして僭越なんですか？　公式に、陛下に抗議しようというのではありません。王太子殿下にだって……やろうとは思ってません。わたしはただ、父上にお尋ねしているだけです」

本当に、クランクレイア姫はその式典に出ても大丈夫なのですか？

「是と答えたら、お前は納得できるのか？」

父の問いに、アマンシールはふわりと微笑んだ。

もしかしたら、初めて見せた表情だったかもしれない。

「そうですね。少なくとも質草をもらった程度の安心はできるかもしれません」

十四の少年の言葉とも思えぬそれに、ファラスース家の当主は一瞬詰まり、それから思いなおしたようにこうつづけた。

「是、だ」

と――。

「陛下と王太子殿下のなさることに手抜かりがあろうはずがなかろうが。万全の態勢は整えてある」
「そうですか」
答えるアマンシールの声には、まぎれもない安堵の響きが宿っていた。
「なら、いいです」
あっさりと答え、彼は先程の父からの言葉にうなずいた。
「仰られる通り、夜会には出席します。用事がそれだけなら、これで……失礼します」
鮮やかに言い切り、アマンシールは父の前を辞した。
引き止められることは——なかった。

わずか十四の息子が部屋を出て行くさまを、息を詰めて見守る日が訪れようとは夢

にも思っていなかった。
冗談ではなく気圧された。
放つ気で、負けたのだ。
（あれは一体、誰なのか）
リュシアンドは自問する。
答えはすぐに出てくる。
あれは自分の息子――自分の、三番目の息子だ。
なのに、噛み合わない。これまで抱いてきた三番目の息子に対する印象と、実際の少年の姿が、うまく重なってくれない。
暢気な息子だとは思っていた。
ファラスース家の一員とは思えぬ……資質ばかりは充分にそなえておりながら、そこに添う意識には欠けた外れ者だという意識が強かった。
たまにあることだとは知っていた。いかに天から才を与えられようと、周囲が望むようにそれを用い、扱おうとはしない者がいることなど。

思えば、小さなときから、あの息子が自分のいうことを聞いたことなどなかったのだ。

早くから見えた才能を、伸ばしてやろうと思ったら、「興味ない」の一言で足蹴にしてくれたし、比類ない才能を持って生まれて来たと信じる息子のために呼び寄せた家庭教師のほとんどはお払い箱になった。

多分に、彼の進路に対する、親としての願いが勝った人選だったことは否めないが、それにしても、あそこまで自分のやりたいことにしか興味を示そうとしない子供を見たのは初めてだった。

（上のふたりとは、似ても似つかない……）

あれで、兄たち以上の才気の輝きを放ったりしなければ、早々に見切りをつけられたはずなのに……なかなか皮肉なことだ。

とは言え、人間というものは、多少なりとも興味を覚えたこと、必要に迫られたことしか真実身につけることはできない。たまに万能の天才という言葉を聞くが、そんなものは十年二十年に一度出現するかどうかという稀有な存在だ。

いくら才があろうと、それを生かす意志がないのではものになるはずがない。

幸い、上の息子たちは、充分に優秀である上に、家業についても意欲的だった。最後の息子に関しては——もったいないが——好きにさせるしかないと、リュシアンドはアマンシールが十になったころには、心の整理をつけていた。

だからこそ、彼から王立学院入学の希望を聞かされたとき、心底驚かされたのだ。この息子に関してだけは、過大な期待は裏切られるだけだと、わかりきっていたにもかかわらず、それでも期待せずにはいられなかった。

結果は……「自然科学を、しっかり学びたいのです」という、実にアマンシールらしい言葉で、またしても泣かされたわけだが。

結局、この息子には好きなようにさせるしかないのだと、諦めとともにため息をついた日のことは忘れられない。

アマンシールの合格通知が、ダランジェイドの屋敷に届いた日のことだった。

面倒なことになりそうな予感——否、確信はあった。

案の定、ファラスース侯爵家の嫡出子として生まれながら、いまやほとんど平民専

門となっている王立学院への進学を希望したという変わり種の噂は、王の耳に届いてしまった。

物珍しさで「一度王宮へ連れてくるように」と王に言われたときには、（ひとの息子を珍獣扱いする気か）と、腹立たしく思ったが、なまじ王家に近しい名門貴族の当主であるだけに、断るわけにはいかなかった。

暗黒時代の後、世界は血なまぐさい歴史を刻んできた。

最たるものは、新たな柱神が選出される時期に重なる王朝の交代劇だが、それ以外にも恐ろしい事態はいくらでも生じ得るのだ。

殊にディエーンにおいては、王家に近しく、しかも栄えている家の者は、細心の注意を求められる。

野心を疑われ、取り潰された家はいくつもあるのだ。

しかも、現王朝が興ってより、そろそろ二世紀――いくら気を配っても配りすぎることはない状況にある。

だから、リュシアンドはアマンシールを伴い、王宮を訪れた。

くれぐれも、勝手に動くなと、息子に厳命したのは、彼の迷子癖と、その結果恥が広まることを心配してのことではなかった。

リュシアンドは本当に、心から、（何事もなく終わってくれ）と願っていたのだ。

一度きりの、国王と末の息子の対面さえ無事にすめば、後は大丈夫だと……そう、あのとき自分は確信さえしていたのかもしれない。

だのに、だ。

あれほど口を酸っぱくして言いつけたにもかかわらず、アマンシールは好奇心に抗いきれず、王宮の庭に出てしまった。

そこで、単に迷子になっただけなら、まだしも救いがあったというのに、よりによって、彼は王家が抱える最大の禁忌とも呼べる少女と出会ってしまったのだ。

『王宮で迷子になるだなどという大恥をさらしたら、王立学院への入学許可など、絶対に潰してやるからな！』

その当時、アマンシールが一番恐れていたことを用いての脅し文句は、結果的にリュシアンドの思惑とは逆の方向に作用してしまった。

姑息にも、末の息子は関係者一同に口止めしたのだ。
おかげで、ますます対処が遅れてしまった。
王に呼び出され、件の王女がアマンシールを気に入ったので、是非話し相手に――と持ちかけられたときには、正直頭が真っ白になったものだ。
クランクレイアという少女は、王家が抱えた爆弾のような存在だった。
そんな彼女と偶然出会うとは、自分の息子の持つ運の種類がいかなるものなのか――疑問に思うより、不安を覚えた。
だが、もはや息子を逃がすことはかなわなかった。
なにか、目には見えない、けれどしっかりと存在するなにかに、絡め捕られるとはこういうことを指すのだろうか――と、ちらりと思った。
あれから……三年になる。
アマンシールは最初こそ、四つも年下の王女の話し相手を務めることに不満を洩らしていたが、すぐにそんな様子を見せなくなり、半年が過ぎたころからは、逆に熱心に王宮に通うようになった。

ファラスース家にとっては幸いなことだった。
もし王家が、ファラスース家に対して、不安を抱いているならば、彼の不遜な態度ひとつだとて、反逆の意図を疑う材料にされてもおかしくはなかったのだから。
（事情ありとは言え、国王にこの上なく愛されている王女に慕われ、王太子殿下にも気に入られ、親しくあることを許されて……）
それに勝ることはないように思われる。
理想的だとすら思う。
なのに、リュシアンドは不安が大きく育っていくのを感じるのだ。
（いったい、これはどういうことだ……？）
彼の放つ問いに、答える声はなかった。

17

その年の豊穣祭は大成功をおさめた。

理由はいくつかあったが、最大のそれは、やはりクランクレイアの存在が公にされたことにあった。

通例より五年遅れで、国民の前に姿を現した彼女を見たとき、アマンシールはそれが、週末ごとに会っている相手であるとはすぐには信じられなかった。

衣装のせいもあったかもしれない。

いつも身軽に動ける服ばかり身につけていた彼女は、その日ばかりは、息をするのも苦労しそうな、かっちりした、しかも裾を引きずる衣装を纏っていた。

淡い藤色の、かっちりした布地で仕立てられた衣装には、赤、紫、青の小さな貴石

を用いた刺繍が施されていた。膝の少し上から入った切り込みの部分から溢れでるのは藤色から紫に徐々に色彩が移っていくよう染められた薄絹――ふわりとした質感を損ねないためにか、そこに石の縫い取りはない。

代わりに、金粉を散らしたような、金糸による玉結びが刺繍されていた。

引きずるほどに長い裾を、クランクレイアはいとも優雅にさばく。とても、常日頃「長い裾の服なぞ無駄の極みじゃ！　ジェスも一度着てみればわかる……あれはほとんど拘束具だぞ！」などと文句を口にしているとは思えない。

しかも、彼女は薄くとは言え化粧を施されていた。

大人の女性のそれほど、強烈なものではなかったが、アマンシールにはクランクレイアが四つも五つも成長したようにしか思えなかった。

（誰だ、あれは……？）

混乱しかけたアマンシールのすぐそばで、ほう、と息をつく気配があった。

ハーリクだった。

夜会への出席は求められたものの、昼間の公式行事の間は自由にしていていいとい

う、父の許しを得ていたアマンシールは、突然屋敷を訪ねてきた友人に、半ば無理やり引っ張りだされたのだ。

彼のそばには、見たことのない淡い金髪の青年が立っていた。

年のころは二十歳前後か。くるくるとよく変わる表情のせいで、はっきりしたことが読み取れない。

だが、ハーリクが心から信頼している様子が見て取れたので、アマンシールも警戒心を抱くことなく、一緒に王宮前の広場にくることを承知したのだ。

そうして、クランクレイアの晴れ姿を目にし、得体の知れない不安を感じた瞬間、伝わってきた――ハーリクのため息。

（なんだ!?）

反射的に身構え、振り返ったアマンシールの目に飛び込んできたのは、喜びに全身をうち震わせているかのような友人の陶然とした顔だった。

「綺麗だし、可愛い！　まさに理想的だ！」

叫んだハーリクの目は、しっかりと王宮のテラスにいるクランクレイアの姿に縫い

止められており、動く気配もない。

「腕利きの絵師の手配が必要だな。あんな綺麗な姿を実際に目にしたら、出来の悪い絵姿なんて見向きもしないに違いないもんな。額つきでも絶対いける！　だけど、腕のいい絵師ほど、作品の出来ばえにはこだわるわけだし……そうだな、銅版画の腕利きの職人も手配しなくちゃな」

ぶつぶつ、ぶつぶつと洩らす言葉は意味不明だったがさすがに三年以上になるつきあいは伊達ではない。

（あ、すっかり新商品開発モードに入ったな）

内心のため息を押し殺し、再びテラスに目を向けようとしたとき、くすりと、かみ殺した笑い声が聞こえた。

ハーリクとともにきた青年のものだった。振り返ると、灰色の瞳を楽しげに細め、アマンシールのことを見つめていた。

名は、なんと言ったか……。

（確か……）

「……ギスカリールさん？」

なにが可笑しいんですか？

そう尋ねるつもりだったのだが、答えを先に言われてしまった。

「いえ、年月は偉大だと思ってね。生まれたときは、本当に小さくて、無事に育つかどうか、気を揉んだのが嘘のように、健やかに成長したものだと思うと……」

でもこの分じゃ、すぐに盗られる心配をしなくちゃならなくなるかな――などと、わけのわからないことをつづけた。

だが、アマンシールにとってその内容は、単なる意味不明の台詞として片づけていいことではなかった。

（このひとは、まさか、クランさまが生まれたときのことを知っている!?）

クランクレイアの実の母親であるオルレイシア姫は、ついに生涯、宿した子供の父親の名を告げなかったという。

未婚の王妹の出産にあたり、国王は細心の注意を払ったとも聞いた。

信用のおける者だけをオルレイシア姫の周囲に配置し、情報は徹底的に管理した

……はずだ。我が子として扱うために、そのあたりの工作に抜かりはなかったはず——だとしたら、そんな王の目を掠めて、生まれたばかりの彼女の姿を目にすることのできたこの男は何者なのか。

青年の年齢が、あと十ほども上に見えたら、アマンシールは真っ先に（これがクランさまの実の父親なのでは!?）と疑ったに違いない。

だが、ギスカリールはどう見ても二十歳前後でしかなく、十を迎えたクランクレイアの実父である可能性は限りなく低い。

だが……そうであるなら、彼が口にした言葉の意味することとはいったい……!?

「そんな、射殺すような目で見ないでくれないか？　説明したいのはやまやまだが、あいにくこんな場所でできる類の話ではないのでね」

自分の危惧が、的外れでなかった場合、それはもっともな話だった。

だから、なおさら得心がいかなかった。

「なら、なんで、こんな場所であんなことを口にしたんですか」

答えは、さらりとした乾いた口調で語られた。

「君という人間を見る必要があった」
「わたし……？」
よく、意味がわからなかった。
だが、以前読んだ書物のなかに書かれていた一節を思い出すには充分な手がかりだった。
『相手の本音を引き出す、最もの近道は、相手を動揺させること』
要するに、相手はこちらの反応を引き出すためだけに、危険且つこちらが危惧せずにはいられない情報を晒してみせたということか。
けれど、自分の反応は盗まれたまま、相手の意図はわからないまま——というのでは、負けっぱなしと同義だった。
再び、ギスカリールが笑った。
「負けず嫌いなんだな。それも好ましい。負けることを従容として受け入れるような輩はいらない」
それは、選別者の眼差しだった。

ますますわけがわからなくなったアマンシールの肩を、ギスカリールが軽く叩いた。

「焦る必要はない。すぐに説明してあげられると思うから」

青年がそう言ったとき、背後から圧力を感じた。

より近くで王女の姿を目にしたいと思った者たちが、詰め寄ってきたのだ。

アマンシールとハーリクの肩を、ギスカリールが抱き寄せ、支えた。

そのときになって初めて、我に返ったようにハーリクが目を瞠った。

「駄目だろう、ぼうっとしてちゃ。いくらいい案が浮かんでも、踏みつぶされて死んだんじゃ、笑い話にもなりやしない」

たしなめるような口調で告げられた言葉に、ハーリクが、ひとつ瞬きした後、息をついて「はい」と答えた。

その双眸には、ギスカリールに対する揺るぐことのない信頼の色が見えた。

(このひとは、いったいどういうひとなんだろう!?)

アマンシールの心はさらに揺れた。

そのひとの姿を次に目にしたのは、意外にも王宮内でだった。
招かれた夜会に出席したアマンシールは、多くの大人たちに囲まれたクランクレイアのそばに、異国風の衣装を纏ったふたりの青年を認め、軽く目を瞠った。
うちひとりが、ギスカリールだったのだ。
（なぜ、あのひとが……？　外国のひとだとは思ってたけど……貴族だったのか？）
ディエーンにあって、淡い金髪は珍しい――殊に貴族に生まれた者には。
黒髪や褐色の髪が一般的で、金褐色でさえ珍しいほどなのだ。
だから、ギスカリールを見たとき、すぐに他国の出身だと思ったわけだが……ハーリクの知人である彼が、なぜ王宮にいるのか、どうしてもわからなかった。
（ハーリクの話じゃ、三年ぐらい前から家に出入りするようになったってことだぞ？口調もくだけてたし、とても貴族とは……もしかして、貴族の子弟でディエーンに遊

学中とかなんだろうか？　まあ……うちみたいに、貴族でも商いをやってるところがないでもないわけだから、商いに詳しくてもおかしくはないけれど……）

だが、なんとなく、違和感を覚える。

はっきりした理由を言葉にすることはできないのだが、ギスカリールは遊学中の貴族の子弟とは思えないなにかを内包（ないほう）している気がしてならないのだ。

背後から、声をかけられたのはそのときだった。

「なにを難しい顔で考えこんでるんだ？」

耳に馴染（なじ）んだ声だった。

振り返ったその先に、次兄ファバルワースの顔を認め、アマンシールは「いえ」と短く返した。

なにをどう言葉にしたらいいのか、わからなかったのだ。

しかし、神学院を優秀な成績で卒業しながら、神職につくことを選ばなかった変わり種――間違ってもお前にだけは言われたくないと、本人が聞けば反論してくるに違いないが――の兄は、アマンシールの視線を辿（たど）り、すぐに納得したようにうなずい

た。

「ああ、あの方々が気になるのか」

その言葉に、思わず彼は問い返していた。

「兄上、ご存じなのですか？」

「ああ、もちろん存じあげているよ、これでも神学院に籍をおいていたからな。他国のこととは言え、神殿同士は交流も深い」

存じあげている——神殿同士は交流も深い。

兄の選んだ言葉に含まれるなにかに、感じるところがあった。

「……まさか、神籍に連なる方々なのですか？」

「おひとりはな。もうおひとりは、連なるどころの話じゃない……ルーシアルの当代さまだ」

「当代さま」

おうむ返しにつぶやいて、アマンシールははっと息を呑んだ。

当代さま——という呼び方は、ディエーンでは柱神に特定して使われることが多

い。

だが、柱神自身は、人の世に関わらぬことを、己が身に課しているはず——しかも他国の柱神が、隣国とはいえ、自らの国を離れ、公式な行事に姿を現すなど……。

「聞いたこともありませんが……」

呆然とつぶやいたアマンシールに、ファバルワースもうなずいた。

「神殿も大騒ぎだったらしい。神座に着かれた御方が俗世に関わるのは如何なものか、とね……だが、血を分けた我が子と、せめて一度なりとも対面を、と望まれたのではねえ。ルーシアルの神殿側としても、強くは反対できなかったという話。だから、安心おし、あの方々がお前の恋敵になることはないからね」

最後、微妙にずれた慰めを口にした兄の台詞を、しかしアマンシールは半分ほどしか聞いていなかった。

(ルーシアルの当代さま？　その方が血を分けた我が子と会いたいと主張して？　それで前代未聞の柱神さまが他国の公式行事に出席!?)

それも、クランクレイアが初めて公に姿を現す式典に——。

否、逆なのか。

彼の意向があったからこそ、今回のクランクレイアのデビューは決定されたのではなかったのか。

神々の加護の証（あかし）たる柱神を得られなかった国々が、『女神の産み娘』と呼ばれたクランクレイアを手に入れようとした。

その危険性ゆえに、王は彼女を通例に反した形で隠すことにした。

だが、十歳という年齢の彼女を、公（おおやけ）に認めるのはなぜなのか――ずっと、気にかかっていたことだった。

我が身を守るに足る力をつけさせるには、成長期のただなかにある彼女には不安要素が多すぎたはずなのだ。

だが、ルーシアルの柱神が、クランクレイアの実の父親なのだとしたら……これ以後、彼女の後見を務めることになるのだと、世間に知らしめるのだとすれば……彼女を狙う者たちの数が減るのは確実だ。

同時に、クランクレイアの心を傷つけてきた、さまざまな憶測を含む噂（うわさ）も終息する

ことになる。

もちろん、正式な婚姻を結ばぬうちに生まれた子供――という事実は残されるが、相手が相手なのだ。世間は簡単にそんなことは忘れるだろう。

しかも、彼女には、『女神が産みし娘』と呼ばれても、それを認めさせるだけの力がある。

世間はこぞって彼女を奉ることだろう。

だが、彼女自身の心はどうなるのだろう？

侍女や女官の心ない言葉に、いちいち傷つき泣いていたあの少女は、今回の環境の変化をどう受け止めるのだろう……!?

わからなかった。

そして、そのことが不安だった。

（どうすれば、最善の道を選べるんだ……？）

惑うアマンシールを置き去りに、事態は動きはじめていた。

だがそれが、あまりにも密やかであったため、彼も、周囲も、すぐには気づくこと

ができなかったのだ。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

この度は『天を支える者　古懸唄』第二巻をお手にとっていただき、ありがとうございます――。

第一巻で、『小さな恋のメロディ』にすら届かなかった前田は、今回の原稿を書くにあたり「今度こそ、絶対にロマンス！　あーんどドラマティック！　最低でも小さな恋のメロディだけはクリアする！」という目標を掲げました（二次目標まで用意するあたり、自分で自分を知っていると言うべきか、弱気というべきか……とほほ）。

そして、依然つづいている今回のクリア度は……やっぱり二次目標止まりでした。さすが、原稿用紙三十枚のプロット――物語に必要なエピソードが多くて、なかなか

登場人物たちの年齢が上がらない……。

更には、これからの展開に欠かせない人物たちも続々登場というわけで、主役ふたりのロマンスには届きませんでした。せめてもの救いは、『小さな……』クリアってあたりでしょうか。いや、それまで届かなかったら、話が進んだことにはなりませんが。

というわけで、少々内容について。

と言っても大したことではありませんが。

子供のころ、わたしは夏になると、兄や近所の男の子たちと一緒に、早朝の山に出かけては、カブトムシやクワガタムシ捕りに精を出しておりました。正確には、兄や男の子たちを手伝って、捕れた虫の一部を分けてもらってたわけですが。

わたしの家は、小高い山の中腹にありまして、夏ともなれば、灯目指してカブトムシやクワガタムシが飛んでくることも珍しくはない田舎でした。ヒラクワガタはもちろん、ノコギリクワガタまで飛んできて、網戸にはりついてました……が、やはり飛び込んできた虫を手に入れるのと、早起きして出かけて行って捕まえるのとでは、達

成感が違いまして、兄も男の子たちも、せっせと山に出かけてました。

そのころから、男の子たちはカブトムシ派とクワガタムシ派に分かれておりました。昨今の「ムシキング」のブームを見ては、「やっぱり男の子は甲虫が好きなんだなー」と思い、ついフィオーン殿下とアマンシールに、甲虫談義をさせてしまったわけです。因みにわたしはしなやかで優美な曲線を描くノコギリクワガタが大好きでした。

あと、芙蓉の虫――ですが、実話です。もっとも、九州だったからかもしれませんが……東京で、青々とした葉が残っている芙蓉を初めて見たときは、驚いたものです。虫食いのあとのない芙蓉を見たのは、そのときが初めてだったかも（こちらの虫については自主規制）。

虫の話ばっかりしてても楽しめない方が大半だと思うので、話題転換。

今回の執筆中のことなど。

今回は本当に、マシントラブルに悩まされました。ただでさえ、原稿書くの遅いのに、パソさんのおかげで、本気で泣きそうになりました。いえ、それも自業自得では

あるんですが。

こまめに記録が基本のパソコン……けれど、最近のパソコンは性能も上がって、滅多なことでフリーズすることもなくなってたものですから、手間隙かけるのが面倒という理由もあって、ちょっと油断してたんですね。

もちろん、ハードディスクにはこまめに記録してたんですが、CDへの記録は、シーンの区切りがついたとこですればいいか……と思ってたら、電源入れても画面真っ暗という異常事態が発生！　おり悪く、もう少しで区切りが、というところまで進んでいたシーンはハードディスクのなか。泣く泣く記憶を頼りに書き直すことに……。でもって、二度目はようやくシーンを書き上げた直後、あとは寝るばかりと、緊張感が途切れてしまったせいか、なにをどう操作ミスしたのか、書き上げたシーンまるごとが……せめてごみ箱に突っ込むぐらいの操作ミスだったら、まだ取り返しがついたのに、本当に、検索かけても見つからないなんて、どんなことをしたのやら……。

おかげで、今回二シーンも、記憶を頼りに書き直す羽目になってしまいました。改稿して、内容がよりよくなった――と前向きに思うには、すでに通りすぎていた締め

切りが痛かったです。

もう二度と、シーンの区切りまでは、なんて欲張るまいと心に誓いました。ワンシーン書くのに最低二日はかかるのに、しかも心は次のシーンに向かってるのに、書き直すなんて辛すぎますもの。

失敗は失敗として、これを糧にすればいいのだわ、と自分自身に言い聞かせ、引き続き三巻執筆に突入する予定です。

次こそ「目指せ、ロマンス！　あーんどドラマティック！（二次目標なし）」

可能な限り速やかに、お届けすることを誓います。

それでは。

平成十七年　某月　某日

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
古戀唄(にれこいうた) 2

COBALT-SERIES

2005年12月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　山下秀樹
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2005　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600692-8 C0193

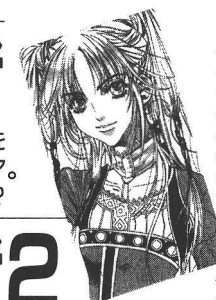
〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者



『不幸中の幸いの権化』の異名を持つ、行儀見習いのナルレイシア。王都の屋敷で働くことになるが!?

天を支える者2

本に囲まれた静かな生活を望むナルレイシア。だが、次代の柱神を見極める選定者として王宮に連れてこられてしまい!?

天を支える者 古戀唄（いにしえこいうた）



夢見がちな少年ガジェスの前に、空から「女神の娘」と呼ばれる王女が降ってきた…。遠い昔の運命の恋を綴った番外編。

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

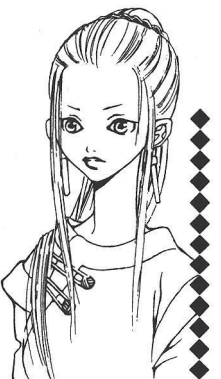
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

揺籃の瞳

聖石の使徒

蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ!

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸(前編)(後編)
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/履門 潤

破妖の剣
魔性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供します。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



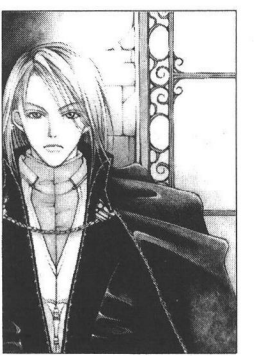
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1～3

前田珠子

イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子

〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

まどろみの守護者

聖獣復活譚 前

銀の守り手

聖獣復活譚 後



目覚める日

聖獣覚醒秘譚 第一部

深き闇の檻

聖獣覚醒秘譚 第二部

昏き夜の果て(上)(中)

聖獣覚醒秘譚 第三部

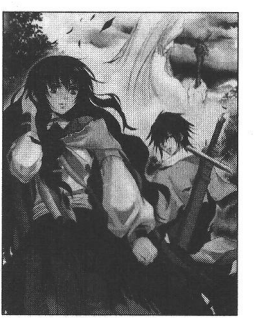
〈好評発売中〉 コバルト文庫

邪悪な呪いが行く手を阻む。

緑のアルダ

第二部～守龍編～　導きの泉

榎木洋子
イラスト／唯月　一



本格的に守龍探しに出発した一行。先行するルダート王子の動向を占いで知ったアルダ・ココはひとり焦る。その彼女に異変が…!?

緑のアルダ シリーズ・好評既刊

石占の娘
荒れ野の星
千年の隠者
謀略の都
虹の白夜
旅立ちの丘
蒼い雪原
熱砂の宮殿
水あふるる都
龍の島

〈好評発売中〉 コバルト文庫

宝玉たちの運命は!? 感動の完結編!

レヴィローズの指輪

黎明の欠片

高遠砂夜

イラスト／起家一子



炎の精レンドリアと決別してしまったジャスティーン。魔術界の崩壊を願うティアラーゼの魔の手から、宝玉たちを救おうとするが!?

〈レヴィローズの指輪〉シリーズ・好評既刊

レヴィローズの指輪
ジェリーブルーの宝玉
闇の中の眠り姫
幽霊屋敷と風の宝玉
シャンレインの石
ルファーヌ家の秘密
グレデュースの鎖
紅の封印
エルカーヴァの種
宝玉泥棒
夜の魔術師
リルファーレの冠
奈落の女王
ローティアスの天秤
夜明けのオルドール
薔薇の終焉
最後の遺産

〈好評発売中〉 コバルト文庫

愛の力が解く魔法とは――？

侯爵様の愛の園

～よかったり悪かったりする魔女～

野梨原花南

イラスト／鈴木次郎



スノウ王女よりフリンギー遠征の命を下されたアザー。一方、ポムグラニットはアザーにかけられた魔法を探るため、時間旅行へ…!?

－〈よかったり悪かったりする魔女〉シリーズ・好評既刊－

レギ伯爵の末娘
公爵夫人のご商売
スノウ王女の秘密の鳥籠（とりかご）

〈好評発売中〉 コバルト文庫

この世でいちばんだいじな人。
今度は、ぼくが守るから――。

ここに降る紫の星

広瀬　晶
イラスト／おおきぼん太



記憶のない少年エヴィは優しい青年キオと暮らしていた。だが、エヴィが過去を思い出したと知ったときキオの態度が豹変する。暴走するキオが向かった先で彼の秘密が明らかに!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086006927

ISBN4-08-600692-8

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫